カウンターアタックー君はあの日のまま戻ってきた 小谷編

武上 渓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
カウンターアタックー君はあの日のまま戻ってきた　小谷編

【Ｎコード】
Ｎ３４８７Ｅ

【作者名】
武上　渓

【あらすじ】
４５才竹山透の元から、自分の世界に帰還した１５才の末次清美。小谷刑事により分部豊は逮捕され、静かな暮らしが戻ってきた。それから2年。岐阜刑務所に収監されていた分部の姿が独房から消えた。ーまだゲームは終わってないぞ老いぼれ小谷ーと書かれた便箋を残して…。分部の先手を打ちながら、犯行を防ごうとする小谷刑事。しかし例によって、分部はとんでもない手に打って出る。君はあの日のまま戻ってきたで描かなかった、小谷キャラ全開でお届けする、フルスロットル人間愛ストーリー！。昭和パート5話に続き、

平成パートも完結！

ー小谷編　前書き

献辞

管理者のウメさんに

君はあの日のまま戻ってきた
クライムズクライシス
にアクセスして下さった
すべての読者さんに感謝を込めて

本作を捧げる

カウンターアタック
～君はあの日のまま戻ってきた　小谷編

ー前書き

まずは、月刊武上でもお知らせしたように、競馬を舞台とした小説は中止させて頂きました。詳しくは月刊武上をご覧ください。
君はあの日のまま戻ってきたのサブかパラレルか?、判断がつかないので、小谷編とさせて頂きました。主題が人間愛なので、ジャンルが恋愛であった前作と区別する為に、カウンターアタックをタイトルにしました。日本語にすると、逆襲で良いと思います。
地下と2部が出てくるので、後半クライムズクライシスっぽい展開になります。そっちの方のファンの方にも楽しんでもらえるかもしれません。
また、君はあの日のまま戻ってきたとクライムズクライシスをまだ読んでいない方は、そちらを読まないと理解できない部分があります。御了承下さい。
ジャンルをどうしようか?と悩みましたが、広い意味でＳＦとさせて頂きました。厳密に言うとＳＦではないのですが、ご理解下さい。

用意可能な方は、昭文社のクイックマップル２１岐阜を、ご用意下さい。地理的位置関係をどうしても知りたい方は、これの１及び３で確認できます。
昭和５５年とありますが、その頃ぐらいの認識でお願いします。
では、雨屋事件終結の２年後から、小谷編をスタートします。

２００８年５月　武上渓

ー第1話リスタート

ー第１話リスタート
昭和５５年８月岐阜県岐阜市北部

あれから2年。
雨屋で行方不明になった末次清美は、１７才の高校生になった。
プロポーズされた竹山透と共に、自転車で北に1時間かかる、県立高校に通っている。
小谷刑事の息子である利治は、２月で３才の誕生日を迎えていた。
４５才の竹山と戦った分部豊は、裁判で3年の実刑を言い渡されて、２年目を刑務所内で過ごしていた。

分部が収監されている岐阜刑務所は、岐阜市北部の…現在のメモリアルセンター北側に建っていた。この刑務所は、網走刑務所の次に重い刑の囚人が収監される施設で、高さ１０ｍ以上ある厚いコンクリート壁に囲まれていた。
岐阜市は、真ん中の長良川を挟んで、通称川南（かわみなみ）　川北（かわきた）と呼ばれる。
初期は、街の大半は川南にあり、この刑務所が建設された頃は人家など無い場所だった。
しかし、昭和５５年頃には周囲を民家が取り囲み、この広大な敷地とコンクリート壁は街にそぐわない景観となっていた。

分部は、この刑務所の中で、ある事件をそのまま実行しようとしていた。
分部は元々４５才の竹山の世界の人間だった。その世界で、この刑

務所は脱獄事件を起こしている。
その脱獄の詳細を、分部はネットのサイトで詳しく知っていた。岐阜刑務所は、この脱獄事件により数年後閉鎖・移転される事になる。

独房は、大きなホールの両側に並んでおり、北側に大きな鉄扉がある。その向こうに看守の詰所があり、２重に鉄格子の扉で仕切られている。
この建物は昭和初期に建設されたもので、幾つか改修された部分がある。
それは、ホールの天井に沿って通っている配管だった。
問題は、この配管が北側の鉄扉の上のコンクリート壁に穴を開けて、外に出ている事だった。改修の際、開けられた穴は塞がれるはずだった。しかし、１５ｍの高さの配管に取り付く方法がないという理由で、穴は塞がれず工事は終了してしまった。
配管は詰所の天井裏を通り、建物の外に出て、コンクリート壁の外に立つ電柱へと続いている。
分部はサイトで見た通り、競馬好きの看守と親しくなり、暑い夜にホールで寝られるよう、独房の鍵をはずしてもらう事に成功した。

午前０時の巡回の後…南側の明かり取りの、天井まである鉄格子の入った窓枠をフリークライミングの要領で登ると、配管に飛び付いた。
サイトの脱獄犯同様、分部も密かに指を引っ掛けるだけで登る訓練を、２年間密かに積んでいた。
フリークライミングなど見た事のない、この時代の人々にとって、それを想像する事など出来なかった。
そして、新しい配管は軋みもせず、分部の体重を支えて、鉄扉の上まで導いた。
詰所の天井裏をくぐり、ポッカリ外に開いた穴から、コンクリート壁まで１ｍを飛び移る。

そこから電柱に飛び移り、ズルズルと滑り降りると…分部は暗闇に姿を消した。
彼の独房の床には、便箋に書かれた文字が残っていた。

ーまだゲームは終わってないぞ　　老いぼれ小谷ー
と。

こうして、分部のカウンターアタックのボールが、昭和の岐阜の街に蹴り込まれた。
岐阜県警捜査1係　小谷（こたに）　晴朝（はるとも）に向かって…。

ー第2話コンペティション　エリアにつづく

ー第2話コンペティション　エリア

ー第2話コンペティション　エリア

午前2時の巡回で、空になった独房は見逃された。分部に取り込まれていた看守の担当だったからだ。
そして午前4時の巡回で、刑務所はパニック状態に陥った。施設内部をくまなく捜索するのに、1時間の無駄な時間を浪費した。
岐阜県警に第一報が入ったのは5時30分…検問が敷かれたのは6時00分。分部は復讐の態勢を完全に整えていた。
小谷晴朝に連絡の電話が入ったのは5時40分。携帯など無く、黒電話のベルと妻が受話器を取る音で目が覚めた。
3才の利治は、頻繁に鳴る黒電話のベルに慣れていて、スヤスヤと寝入っている。
妻の佐恵子(さえこ)が振り返ると…すでに小谷晴朝の手が受話器を受け取ろうとしていた。
「田島さんから…。」
佐恵子が言うと、うなずくだけで受話器を受け取った。
「小谷だ…。……。そうか…。末次家と竹山家には、三橋と加藤を張り付けろ。俺の自宅に栗林を寄越してくれ。朝のラジオ体操は止めるように町内会長に電話だ。6時では間に合わんかもしれんが…しないよりましだ。小中高の校長、PTA会長にも登校中止を要請しろ。今日登校日の学校があるかもしれん。」
小谷晴朝は言いきると、電話を切った。佐恵子がすでに、背広を用意して待っている。素早く着替えて、官舎の玄関に出ると、栗林刑事が車で入ってきた。

「栗林。分部がウチを襲うかもしれん。頼むぞ。」
「小谷さんはどちらに？。」
「分部のアジトになりそうな場所を突いてみる。コンペティション
　エリアを狭めないと、手に負えなくなるぞ。」
コンペティションエリア…ＣＡとも呼ぶ。直訳で競合地域。小谷が
好んで使う、小谷用語だ。
「街中がＣＡってわけですか…。」
「活動拠点を奪えば、ＣＡは限定できる。問題は限定するまでの間
だが…ゼロにはできんが、少なくすれば分部の精神的優位性を奪う
事ができる。キーを寄越せ…。」
小谷晴朝は、栗林からキーを受け取ると、官舎前に停めてある覆面
パトカーを発進させた。

無線を署に入れる。
「移動フタマルイチキタ…小谷。キタ本部どうぞ。」
ー小谷か。谷垣だ…分部の所在は不明だ。目撃情報もないー
「署長。川北（かわきた）の農作業小屋を潰してみます。奴が拠点に使ってるか
もしれません。」
ー…小谷。刑務所に書き置きがあった。分部の目的は、お前に対す
る復讐だ…気をつけろ。ー
「ならば好都合です。自分から動きを限定するとは…分部らしい。」
ーお前の指示は、田島が全て実行した。県警全体は、岐阜市と隣接
市町村の検問を6時に完了した。他に必要な物はあるか？。ー
「すでに分部は、最初の標的を狙える位置に居るはずです。動いた
ら、その地域から外に出さないようにして下さい。」
ー分かっている。最初の標的の予測は誰だ？ー
「…言えません。分部がこの無線を聞いている可能性があります。
ですが、分部が動けば確実に身柄を押さえます。」
ー頼むぞ。何か有ったら無線を入れろ。後続を投入させる。ー

「わかりました。」
小谷晴朝は無線を切った。最初の標的ウンヌンは、分部が無線を聴いていた場合の張ったりだった。効果があれば、分部は動かない。こちらは時間をかせげる。
「期待うすだが…。」
小谷晴朝は独り言を言った。

この時分部は、小谷の無線を、手回しハンドルで蓄電できるラジオで聴いていた。この当時、警察無線はデジタル暗号化されておらず、市販のラジオで周波数を合わせれば聴く事ができた。
最初に清美を雨屋に追い込んだ時…分部は背負っていたナップサックを、古い米櫃の中に隠した。2年を経て雨屋でナップサックを回収すると、岐阜城の天守が再建されている金華山に登った。その天守の展望台に入り込み、双眼鏡で市内を眺めつつ、警察無線を聴いていたのだ。
今までの分部なら、末次清美か竹山透に即襲いかかっている所だが…予想外に雨屋で分部を待ち伏せていた小谷晴朝に、慎重になっていた。
この小谷という刑事が、どういう人物なのか知った上で、動く事に分部は決めた。警察無線を聴いた限りでは、今まで通りに動いていたら、全て失敗に終わっていた事を認めざるおえなかった。
奇策は、この刑事には効果がない…。
「なら。小谷自身の足元をすくうしかないって事か…。」
分部は双眼鏡の中で走り廻る、無数のパトカーを眺めながらつぶやいた。

ー第3話沈黙　小谷が仕掛けた心理戦に沈黙する分部。戦いの前の

静寂。小谷晴朝の分部に対する想いとは…！。

ー第3話沈黙

ー第３話沈黙

その日。
分部は動かなかった。
小谷は、水田に点在する農作業小屋を全て見て回り、昼の１時過ぎに雨屋にやってきた。
夏の日差しの中でも、小屋の中は涼しく感じた。開かれて、フタが無造作に床に落ちている、米櫃を見て、分部が此処に居た事を小谷晴朝は感じた。この小屋で小谷晴朝は、地味な地方の刑事から、脚光を浴びるスターになった。末次清美の誘拐事件は全国に報道され、一面のトップで優秀な刑事として扱われた。中央からは、移動の打診を受けたが小谷晴朝は断った。そのかわり、自分の捜査手法を明かし、全国の刑事に講習を行う事を願い出た。この当時は、刑事が自分のノウハウを他人と共有するなどと考える時代では無かった。個人どうしが競い合い高めてゆくという時代だった。しかし、この講習によって、格段に検挙率がアップした。警察庁は、このノウハウを小谷式捜査法として教本にし、海外にまでその名を高めてゆく…。これは、多次元宇宙の中でも、この世界だけに起こった特異な現象だった。分部というファクターが、この世界に違った局面を与え続けた結果と言える。しかし、それは誰にも気づく事の出来ない事である。話を戻さなければならない。

「どうやら、初動は成功したようだが…。次はどう出るか。分部に

も学習能力はあるという事か…。」
小谷晴朝は、雨屋を出て、道路脇に停めた覆面パトに戻ろうとした。
正面から、自転車に乗った男女が来るのが見えた。
「小谷さーん。」
女の子の方が、小谷を見つけたようだ。
「清美ちゃんか。分部が脱獄した。家に戻った方がいい。」
17才になって、女性らしくなった清美と、まだ幼さが残る透ちゃんが自転車を降りて、小谷に頭を下げた。
「そうなんですけど…こうやって清美ちゃんと走ってた方が、分部が見つかり易いかと思って。」
透ちゃんは、それでも近くで見るとたくましくなっていた。
「分部はアイデアマンだ。思いもよらない事を考えつく。最善の方法は、分部に見つからない事だ…それにしても、清美ちゃんは綺麗になったな。分部が見たら、確実に狙ってくるぞ。透くん。すぐに家まで送ってゆくんだ。」
「はい…わかりました。」
透ちゃんの横で、清美ちゃんは、小谷の言葉に顔を赤らめた。
「行こう。清美ちゃん。」
透ちゃんが促すと、うなずいて自転車に乗った。
「透くん。結婚している者として助言する。女性は褒めてやれ。綺麗になるためには、女性は毎日努力しなければならない。男はその気持ちに対して敬意をはらわなければならない。わかるか？。」
「はい…。」
「それは男として、恥ずかしい事ではない。男らしくないと云う事ではない。」
「はい。努力します。」
小谷は戸惑う透ちゃんの肩を叩いた。
「それでいい。行くんだ。」
2人は頭を下げて、自転車で去って行った。

少し解説を加える。
昭和５０年代の高校生にとって、大人は危険極まりなかった。この当時の大人は、なんの前触れもなく殴ってくるのは普通だった。教師も殴ったからといって処分もされなかった。むしろ、殴られた子供は何をやったんだと親にまで怒られた。おそらく２００８年の高校生には、清美と透の小谷に対する態度に違和感を感じるだろう。それが良いのか悪いのかは、読者さんが判断して頂きたい。
では、話しを戻します。

雨屋事件で清美ちゃんは、３０年後のひとつの結果として、透ちゃんの姿を見たと小谷に話した。おそらく３０年後の彼にも恋したのだろう。それは紛れもなく良い事だ。
ならば、分部豊にも良い結果と云うものが有るはずだと小谷は思った。彼だけがマイナスの結果を背負わなければならないのは不自然だ。
小谷はそう思いながら、自転車で去ってゆく2人を見送った。

覆面パトに戻ると、無線を入れた。
「北移動フタマルイチ小谷。北本部どうぞ…。」
ー田島です。岐阜城の入口の鍵が壊されて、侵入者があったようです。多分、分部かと…。ー
「上から見てた訳か。こっちも観察されてるわけだ。…奴は慎重になった。短期決戦とはいかなくなったな。今、末次清美と竹山透に雨屋で会った。三橋と加藤に説教しといてくれ。」
ーすいません。私の責任です。ー
「いや。責任は2人にある。お前には無い。間違うな。」
ーはい。ー

「奴は今夜あたり、仕掛けてくる。それまで休んでおけ。」
ーはい。小谷さんは、これからどちらに?。ー
「いったん、署に戻る。」
小谷は、金華山の上に岐阜城を仰ぎ見てから、覆面パトに乗り込んだ。

ー第４話県警本部　分部と心理戦を繰り広げる小谷に、県警本部から呼び出しが！現場から引き離される小谷。新任県警本部長を味方に引き入れられるか！。

ー第４話県警本部

ー第４話県警本部

所属する北署に戻った小谷は、無線指令室に入って行った。谷垣署長がそこで待っていた。彼は部下にできるだけ制約を与えないで仕事をさせる才能の持ち主で、そのために県警トップとやり合う為に、中央に戻れずに北署の署長をすでに１０年勤めている。
小谷が独自のやり方を開花させる事が出来たのは、この署長あっての事だった。そして、今日も何かあったようだと小谷は直感した。
「小谷。県庁が呼んでいる。捜査本部付きだ。すぐ行け。」
「わかりました。しかし遠いですね現場から。」
署長はそれには答えずに言った。
「今年４月に着任した、神谷本部長の事は聞いてるか?。」
「優秀な方だと聞いてますが?。」
「優秀だ。だが、現場を踏んだ事がない。これは最悪だ。ぶつかると事件を外されるだけじゃ済まんぞ。」
「現場をお知りにならないのなら、これを機会にお教えするまでです。」
「それが危険だと言ってるんだ。」
「危険なのは、現場を知らない指揮官に指揮される事です。これ以上に危険な事はありません。現場の捜査員の安全の為には、私が交番勤務になる程度であれば、安いものです。」
谷垣署長は、平然としている小谷を怒った目で睨んだ。
「小谷。お前を交番勤務なんぞに落とすわけにはいかん。」
「署長。心配は分かりますが…むしろ神谷本部長を使った方が有利

に展開出来るかもしれません。一種賭けになりますが…。」
「フン…。もし賭けが外れた時は、俺がなんとかしてやるが、それも上手く行くかどうか…。」
「分部に関しては、私がエキスパートです。それが本部付きの理由でしょう。ならば、神谷本部長は聞く耳を持っているはずです。事件を早く収束させたいのがトップの思惑でしょう。その思惑に沿っていれば、ぶつかる事は無いはずです。」
谷垣署長は暫く沈黙した。
「早く収束出来るか？。」
「無理でしょう。分部を確保するには、2週間は必要です。上手く事が運んだ場合ですが…。」
「2週間もかかったら、県警本部は発狂するぞ。すでに市民から苦情の電話が殺到しているらしい。まだ、1日目だぞ。」
谷垣署長はウンザリした顔をした。小谷は、本部とのやり取りで苦労しているらしい署長を思った。
「今朝の田島が発した通達で、戸外に子供達の姿はありません。この対応を見て、分部は沈黙しています。まっすぐに本命に向けて、一発勝負をかけてくるはずです。そこを押さえれば、市民の苦情は賞賛に変わります。本部は嬉しくて発狂するかもしれません。」
谷垣署長は、しかめっ面を思わず崩して笑ってしまった。
「…お前には勝てんな。本部の鈴屋（すずや）にお前の事を頼んでおいた。彼を頼れ。」
「柔道の方のお仲間と聞きましたが？。」
「関節技の天才だ。奴が技を掛ける瞬間を見切れた奴はいない。それくらいキレが良い。だが、物事の察しが悪い。あまり多くを期待すると当てが外れるから気をつけろ。」
「いや。それも、こちらの戦力として使えるでしょう。ありがとうございます。」
小谷は署長に一礼すると、無線指令室を出た。ちょうどトイレから戻った田島と廊下で出会った。

「小谷さん。これから本部ですか？。」
「あ～田島。こっちは頼むぞ。分部に聞こえるように、無線で俺が県庁に行く事を流してくれ。上手く乗ってくれれば、奴は動いてくれるかもしれん。」
「最悪は分部が動かない事ですか…。」
「あぁ。動かないと署長も言ってたが、県警本部が発狂する。そうなれば、分部のひとり勝ちだ。そうなったら、別の手を考えなきゃならん。」
「さっき、今夜あたり動くと無線で言われましたが？。」
「栗林から、連絡が入る事を祈っていてくれ。」
田島は一瞬何の事かわからなかった。
「…栗林？。まさか…ワザとですか？。賛成できませんが？。」
「うちの奥さんの事は知ってるだろう？。田島。」
小谷は微笑みながら田島を見た。
「そうですが。私ならやりません。」
小谷はさらにニッコリ笑って言った。
「お前がやるやら、俺がやらせん。」
笑ったまま小谷は田島に背中を見せて、階段の下に姿を消した。

岐阜県の県庁舎は、岐阜市南部の薮田と呼ばれる場所にある。県庁舎の会議室に
ー岐阜刑務所脱獄犯捜査本部ー
の看板がすでに掲げられていた。
（まるでお祭り騒ぎのようだ）と小谷は先が思いやられる思いだった。
会議室に入って行くと、移動式の黒板に分部の顔写真と特徴が書かれた紙が貼られ、検問の状況が地図上に示されている。
室内には黒板を背にして、神谷本部長と副本部長の鈴屋だけが居た。

神谷本部長はまだ２５才の青年で、とても犯罪者を扱えるようには見えない。鈴屋も３５才のエリートで、人事部長といった印象を拭えない。
鈴屋が小谷に気付いて、神谷本部長に知らせた。
「小谷刑事。神谷です。よろしくお願いします。」
立ち上がって、握手を求めてきた。
その深く吸い込まれるような目を見て、署長が言っていたような人物では無い事を小谷は直感した。
逆に、お守り役を押し付けられて困っていると云う顔の鈴屋の方が、厄介かもしれなかった。
「岐阜北警察署捜査一係小谷です。一刻も速く分部を確保しましょう。」
「それには、分部に最も詳しい小谷刑事のアドバイスが不可欠です。彼の所在は今現在不明です。彼の潜伏先を、どう見ておられますか？。」
本部長らしからぬ言葉使いに、鈴屋は不満そうに言った。
「本部長。年齢が上だからと言って、その言い方はどうかと思いますが？。」
神谷は冗談でも言われたかのように、軽く返した。
「物を知らない者が教えを乞うのに、上司も部下も無いでしょう。我々は今回の事件では、完璧に小谷刑事をサポートするのが役目と思いますが？。鈴屋副本部長。」
鈴屋は黙った。小谷は、このタイプが仕返しに執念を燃やす事を知っていた。神谷本部長は味方であり、鈴屋は敵である事を認識した。
「分部が私に対する復讐を目的としている事は御存知でしょうか？。本部長。」
「聞いています。」
「分部が復讐の為に標的とする可能性があるのは、末次清美…竹山透…一般市民の中の小中学生。そして、私の家族です。」
「小中学生に関しては、北署から外出禁止の通達が各学校長に出た

と聞いています。末次、竹山の両名には身辺警護が付けられていると報告を受けていますが？…小谷刑事のご家族の方は報告を受けていません。」
「栗林　清一名を付けています。」
これに鈴屋が食いついてきた。
「…なんだと？。栗林は今年刑事になったばかりの坊やじゃないか…。しかも一名とはなんだ？。二名一組が原則のはずだろう？。」
「分部は警察無線を聴いていると思われます。そこで、谷垣署長に家族には二名は割けないと言ってもらいました。」
「…ワナですか？。」
神谷が言うと、鈴屋が立ち上がった。
「何を考えている？。妻子を使って、何をするつもりだ？。」
神谷が、手で鈴屋を制した。
「分部が動かないと、我々は窮地に陥る。いい作戦ですが、私も奥さんとお子さんが心配です。」
「私の妻は、合気道の師範の免状を持っています。それを分部は知らないはずです。無警戒の分部が妻と子供を襲うなら、何の心配も要りません。」
「だとしても小谷。確保出来るのか？。奥さんが分部を？。」
「鈴屋副本部長。周りに刑事を配置したら、分部は動きません。もし私の家族を分部が襲えば、彼の居場所を限定できます。彼は復讐を果たす為に、私と接触しなければならない。自らオリの前に来てくれます。広大な地域をローラー作戦する必要がなくなります。本部がこれを承認して頂けないのなら、話は別ですが？。」
「できるか！。ご婦人と幼児を使って、犯人を追い込んだなど…他県から良い笑い者だ！。」
神谷本部長は、冷めた顔で鈴屋の怒った顔をしばらく眺めたあと言った。
「…このままでは、何もしなかったと…岐阜県警は無能だと言われます。ならば、笑い者になった方が良いと私は考えますが？。」

「…それは。本部長の判断です。」
「ならば、私と一緒に笑い者になって頂けますか?。」
「……。」
「すぐに各部署に連絡です。小谷刑事のご家族が襲われたと同時に、北署の官舎を包囲します。連絡は無線でなく、電話で行ってください。」
鈴屋副本部長は、渋々スチール机の上に引っ張って来ている、黒電話の受話器を取った。

ー第5話ファーストアクション
ついに分部が動いた!。小谷刑事のワナに掛かるのを待つ田島に、末次清美の母親から電話が?。本命か陽動か?。分部のカウンターアタックに小谷のディフェンスは功を奏するか?。

ー第5話ファースト　アクション

ー第5話ファーストアクション

長良川の北側から、鳥羽川という支流が流れ込んでいる。
この長良川と鳥羽川の間に、こんもりとした小山がある。遥か戦国時代…斎藤道三の時代、ここに鷺山城（さぎやまじょう）があった。城と言っても、行政を行う館があっただけで城郭ではなかったようだ。現在岐阜城がある金華山は、山が険し過ぎると云う理由で、守護職だった土岐氏は鷺山で政治を行っていた。
この小山の森に、分部は潜んでいた。小山の脇には小学校がある。しかし、校庭にも街にも朝から、子供はおろか大人も姿を見せなかった。パトカーがひっきりなしに走って、外に出ないように呼びかけている。
イヤホンで警察無線を聴いている分部は、小谷の意図が判っていた。明らかにワナだが、敢えてこのワナに引っかかってやるのも面白いと…。もちろん、小谷の妻が合気道の達人である事は知らないが、何らかの仕掛けがあるだろう事は予測できる。
「小谷の息子がワナなら…筋書きをもう少し面白くしてやるか。」
分部は鷺山を降りた。

午後6時。
竹山透こと透ちゃんは、自宅から清美ちゃんに電話をかけた。母親のよし子が出た。

「アラ?、透ちゃん。中学のプールで待ち合わせでしょ?。」
「えっ?。待ってください。そんな約束してません。」
「さっき電話があって、中学のプールで会うって…。」
「してないですよ。おばさん!警察に電話してください。分部です、その電話。誘い出されたんです。僕はすぐ中学校に行きます。」
激しく受話器を置いて、靴のかかとを踏んだまま、玄関の自転車に飛び乗った。心臓が激しく躍っている。自転車のスピードがイライラする程おそく感じた。

北署では、谷垣署長と田島達が、栗林からの連絡を待っていた。
「動いてくれますかね。都合よく。」
田島が言い終わらない内に、電話が鳴った。
「はい。田島…末次さん?。…何ですって?。クソッやられた。」
最悪の事態になった事を感じて、部屋中の空気が緊張した。田島はすぐに無線に飛びついた。
「全移動、全移動、上土居(かみつちい)中学校に急行。繰り返す。上土居中学校のプールに急行。末次清美一名が犯人に誘い出された…」
谷垣署長は、その横で電話に飛びつき、小谷家の番号を回す。
「……栗林?。末次清美が上土居中学校に誘い出された。陽動ならそっちに分部が行くぞ…」
田島は無線から離れると、署内の部下を小谷家と上土居中学校に割り振って、出動させた。

県庁の捜査本部も色めき立っていた。検問を再編成して、上土居中学校と小谷家を囲むように指示が飛んだ。
小谷が他の刑事と共に出ようとするのを鈴屋副本部長が制止した。
「どこに行く!。命令無しで動くとは何事か?。」
「では命令をお願いします。」

「ここに居ろ。お前は本部付きだ！。」
「分部は私への復讐が目的です。私が行かなければ、犯行がエスカレートします。末次清美の危険度を少しでも下げるべきです。」
「お前はただのコマだ。コマが考えるな。考えるのは本部がやる。だいたい、これから行って間に合うと思うか？。」
鈴屋は小谷が動く事の効果を理解できない。小谷は神谷本部長を見た。
「小谷刑事と同じ考えです。末次清美はエサでしょう。分部は小谷刑事が来るなら待つでしょう。…分部に聞こえるように無線で流します。行って下さい。」
鈴屋は小谷が行かないように、右腕を関節技でキメる行動に出た。
「私には、理由が理解できません！。市内の移動が動いているのに、何故小谷刑事が行く必要があります本部長？。」
「腕を離すんです。分部は普通の犯罪者ではありません。最終的に確保できるのは小谷刑事だけです。我々に出来るのは、限定した地域に追い込む事だけです。」
神谷本部長は、関節技の天才に対してウデをキメに行った。瞬間的に、小谷の腕の関節技が緩んだ。小谷はそれを見逃さず、腕を抜くと敬礼して言った。
「神谷本部長の命により、小谷出動します！。」
鈴屋は、神谷本部長の関節技をかわしたが、再び小谷をつかまえる事はできなかった。すでに、小谷刑事の姿は消えていた。

竹山透は、祈る思いで南に自転車を走らせていた。
桑畑の間からは見通しが悪い。中学校の校門は、東と西に有り、西が正門で東が裏門になっている。
プールは、この東裏門の脇に有る。
裏門と言っても車2台分のスロープになっていて、職員の車両は全てこちらから出入りしている。

そのため、入り口をふさぐ物はない。どちらかと云うと、正門よりもこちら側から出入りする人間の方が多い。
中学校は水田に囲まれていて、道は南北に門の前を通っている。門のスロープを登らないと、そこに居るはずの清美ちゃんと分部は見えない。スロープはキツくて、透ちゃんは入り口で自転車を捨てて駆け登った。もはや窒素するかと思いながら、スロープを登り切った。

プールの入り口は右手に有り、１m程度の高さの鉄柵の扉の向こうに、人影を認めた。
「ほぅ?。一番乗りは竹山か…相変わらずだな。」
分部の手には、刃渡り１０Cm程度のナイフが握られている。
プールに登って行く階段に腰掛けているが…清美ちゃんの姿が無い。
「清美ちゃんをどうした?。コノヤロー!。」
透ちゃんは、頭の中が真っ白の状態で叫んだ。
「そこの男子更衣室の中だ。女子の方は鍵が掛かってたんでね…。」
分部は、透ちゃんの登場を楽しんでいるように見えた。
透ちゃんは、鉄柵に飛びつきよじ登ると、その上に立った。
「さしずめ、トップロープからブレンバスターでも決めるつもりか?。やめとけ…下はコンクリートだ。それより、小谷刑事が来るのを待ったらどうだ?。それまでは、お前の清美ちゃんをいたぶっても、俺には何の意味もない。」
分部にとって、少女らしくなくなった清美ちゃんは、興味の対象ではなくなっていた。だが透ちゃんには、そんな事は理解できない。
「ウソだ…清美ちゃんにイヤラシイ事しただろう…許さない!。」
透ちゃんは叫んで、鉄柵から飛んだ。
がっ。鉄柵から足が離れなかった。
ジーンズのベルトの後ろの部分を誰かがつかんでいて、前傾しながら静止した。そして、後ろに引っ張っられ落ちた。

下で抱き留めたのは背広姿の若い男だった。それは清美ちゃんの身辺警護をしていた三橋（みつはし）と云う刑事で、もう一人は透ちゃんの家に来ていた加藤刑事だった。
「あ～ぁ～。やっとボディガードの刑事さんが追いついたか。じゃあそろそろ、清美ちゃんにナイフを突きつけるとするか…。」
分部は立ち上がって、男子更衣室のドアを開けた。
中には、手足を縛られた清美ちゃんが転がされていた。
分部は清美ちゃんを立たせると、背後から首筋にナイフを当てた。
「さて。小谷刑事を呼んでもらおう。呼ばないと、呼ぶ気になるように…色々しなきゃならない。」
三橋刑事が透ちゃんを抑えて言った。
「こっちに向かっている。周りは固めてある。逃げられないぞ…。」
分部は笑った。
「若いな。だが才能はある。老いぼれ小谷好みだな…。固めて、その後はどうする？。そこからはアドリブだ。誰も教えてくれん。若手がやりそうな事は幾つかある。全部間違いだ。だが、間違って覚える事もある。この清美ちゃんに犠牲になってもらった上でだが…。」
「どうやって誘い出した？。」
「小谷刑事の子供を誘拐した。無傷で返して欲しければ、ノートを持って１０分以内に中学校のプールに来い。これだけだ。」
「何故プールだ？。」
「雨屋は見通しが良すぎる。ここは外から俺の動きが見えない。小谷刑事のアドリブが見られる。さて…。」
分部は、コンクリートの階段に置いた銀色のラジオを、片手で拾い上げるとスイッチを入れた。
警察無線がノイズと共に流れ出す。
ー分部…聞いてるか…小谷だ…すぐに到着する…それまで待っていろー
「…なる程。お見通しと云う訳だ。だが、ヒーロー小谷も知らない

事がある。」
分部の尻ポケットに、２つ折りにして突っ込まれているノートは、透ちゃんにも二人の刑事にも見えなかった。しかし、背後のコンクリート階段に、ノートが放っている光は見えていた。しかし、三人にはそれが何なのかわからなかった。以前分部はアパートの二階廊下から、この世界に落ちた。つまり、雨屋である必要は無かった。清美ちゃんが、自分が汚されると思う気持ちとノートがあれば、場所は関係なかったのだ。猿ぐつわをされている清美は、必死にそれを伝えようとしていたが、三人には伝わらなかった。

時間が過ぎ、中学校は警官隊によって完全に包囲された。もはや裏道をどんなに知っていても、逃げる隙間はない。
そこに、小谷刑事が到着し鉄柵の前に立った。
分部は、背後から清美ちゃんの首筋にナイフを当てながら、笑った。
「ようこそ。見事なカウンターアタックだっただろう?。今からゴールシーンをお見せする。よく見ておく事だな。…老いぼれ小谷。」
小谷刑事は、コンクリートの階段に光が映っている事に、すぐに気づいた。分部を雨屋で逮捕した時…清美ちゃんが持っていたノートが光っていた事を、小谷はハッキリ覚えていた。
迷う時間など無かった。即座に鉄柵を越えて、穴を見つけて行かなければならない。
どこだ…。

分部の背後が…階段の上が…あの時のように、ボヤケ始めている。
小谷は鉄柵に向かった。
しかし、その前を透ちゃんが先を越して動いた。この青年の一途な気持ちを押し戻したら、分部も清美ちゃんも見失ってしまう。
分部がクルリと回って、階段を清美ちゃんを抱えて駆け登ってゆく。

透ちゃんのすぐ後ろを、小谷も鉄柵を越えて、階段を登った。
ーそっちに行ったぞぉ！ー
と叫ぶ三橋刑事の声が聞こえるが、そこに分部の姿はない。
清美ちゃんが、小谷と田島に二年前に語った、３０年後の世界…すでに自分は死んでいる世界…行けば戻れないかもしれないと小谷の頭の中を不安がよぎった。
「分部も含めて、見捨てる訳にはいかん！。」
言いながら小谷晴朝は、よどんだ空気の中に突っ込んで行った。

ー第６話スーパーセーブ
小谷晴朝が昭和５５年から飛び込んだ先は、平成２０年８月だった！。ホームからアウェイへと局面は厳しさを増してゆく！新たな味方を得て、小谷晴朝と分部豊の戦いは予測不能の展開に！。

ー第6話スーパーセーブ

ー第６話スーパーセーブ

分部を先頭に飛び込んだ先は、平成２０年の８月２０日だった。
上土居中学校の２年生セイヤとミクは、真っ暗なプールサイドに横たわっていた。アダルトビデオで見た事をしようと、とりあえずキスに行く為に、ミクに顔を寄せていった。その右目が何か動く物を感じた。
そしてナイフを持ち、縛られた人間を横抱きにした男が向かってきた。

ー踏まれるー

と感じたセイヤは、ミクを守る為に覆い被さった。
その２人を飛び越えようと、分部はジャンプした。しかし２人分の体重は、飛び越えるだけの高さを与えてくれなかった。左足は通過したが…右足が引っかかった。
飛ぶ時に、転ぶ事を予想した分部は、清美を左のプールに投げ出した。雨屋でノートが爆発した時、完全に意識を失った事を分部は怖れていた。それを防ぐ為に、前転で転がりながら、尻ポケットのノートをプールに向かって投げた。
硬いプールサイドを転がりながら、後ろから来るはずの小谷刑事の方を向こうと、体勢を持っていった。

分部が後ろを見る前に、竹山透は清美ちゃんを助ける為にプールに飛び込んでいた。
そして、小谷刑事はセイヤとミクを飛び越えたが、すぐには止まれず、分部も飛び越えプールサイドの外柵にぶつかって体を止めた。

振り返ると。
すでにプールサイドに寝ていた人間を人質にしていた。
「分部。毎回毎回同じように、女の子にナイフ突き付けて…飽きないか？。」
小谷は半ば呆れて言った。
それを遮るように、セイヤが喋り始めた。
「待って。待て…それ以上罪を重ねるな…いいか？それで止めれば、一年で出られるぞ…キズつけたら3年は出られない…よ～く考えろ。母が泣くぞ…。」
及び腰で、両手を前にパーの形で突き出している姿に、分部も小谷も見入ってしまった。
プールの中では、透ちゃんがなんとかして、清美ちゃんを助けようともがいている。
そしてノートが爆発した。
ドンッ。と鈍い音がして、滝の逆再生のようにプールの水が、上に向かってほとばしった。２０ｍ近くまで上がると、プールの外にドドッと降り注いできた。その雨が止んだ時…分部の姿だけ、プールサイドから消えていた。

プールサイドではセイヤが
「ミクー。」
と叫び、水の無くなったプールの中では
「キヨミちゃん！。」

と透ちゃんが叫んでいる。
小谷はプールの中に降りて、清美ちゃんのロープを解いてやり、透ちゃんと2人でプールサイドに上げた。セイヤは、携帯を取り出して１１０番通報の真っ最中だった。
「…彼女が襲われたんです…ナイフ持って…場所?。上土居中学校…オレ?三橋星矢…ミツハシ　セイ…それより、逃げたんですよナイフの奴が…だから、名前?加藤　未来…ミク…違う、セイヤは俺で、襲われたのはミク…知らねえよ、会った事ないんだよ。出会い系サイトなんか関係ねえよ…」
小谷は、トランシーバーに向かって話しているセイヤに言った。
「良ければ、私に話をさせてくれないか?。」
「あ～言ってやって下さいよ。話通じないんすよ。」
小谷は、その小さなトランシーバーを受け取って、耳に当てた。
「北署の小谷利治に連絡をお願いします。小谷晴朝が上土居中学校のプールサイドで待機していると。」
ーあぁ…小谷刑事ですか?。親父さんですか?。今、環状線で事故処理してます。近くなんで、呼び出しますよー
「頼みます。」
小谷はトランシーバーだと思っている携帯電話をセイヤに返した。
「すぐ刑事が来る。待とう。」
セイヤは小谷をマジマジと見て言った。
「おじさん。もしかして刑事?。」
「元刑事だ。」
「やっぱり。顔がさデカっぽいよ。」
ミクはパニックになって、プールサイドに座り込んでいた。
「その子を介抱してやれ。君の彼女か?。」
「そうミク。俺はセイヤ。おじさんは?。」
「小谷だ。ここに息子が来る。」
「そりゃあいい。こんなの身内じゃないと信用されないっすよ。」
全員ずぶ濡れで、女の子2人は放心状態だった。

2～3分して、タイヤの音と共に車が入ってきた。ドアが忙しなく開閉される音がして、ハンドライトの光と一緒に、2人の男がプールサイドに上がってきた。
「あ～刑事さん、聞いて下さいよ…。」
そう言うセイヤを無視して、小谷利治が小谷晴朝を見て言った。
「父さん！。いったい？…分部がまた？。」
隣りの三ツ矢が小谷晴朝をマジマジと見つめている。
「脱獄して、ここに逃げ込んだ。竹山透に末次清美も一緒だ。」
「なんでまた…。」
「復讐だそうだ。田島に連絡を取ってくれ。」
「電話します…。」
セイヤが持っていたのと同じようなトランシーバーが背広のポケットから出てきた。
「それは電話か？。」
「えぇ…携帯電話って言うんです。…あ～本部長…小谷です。また分部が脱獄して逃げて来ました。親父まで追いかけて来てまして…話しをしてもらえますか？…。」
小谷晴朝は息子から、携帯電話なるものを渡されて耳に当てた。
「田島すまん。逃げられた。手配を頼む…この時代では俺は刑事じゃない。やれるのは利治の助手までだ。俺は死んでるんだろう？。ここじゃ…。車か…ありがたい。運転の仕方は同じか？。…同じやつを用意してくれるか…頼む。」
小谷晴朝は、息子に携帯を渡した。
「とりあえず、濡れた服を着替えましょう。」
「さえ子には、あらかじめ電話をしておこう。心の準備がいる。」
「そうですね…心臓麻痺で倒れたら大変だ。」
分部のカウンターは、セイヤとミクのスーパーセーブで、偶然クリ

アできた。
しかし、ホームの試合がアウェイに変わってしまった。
ー苦しくなる
小谷晴朝は、スーパーサブの息子をみながら思った。

ー第７話小谷家
３０年後の田島、妻との再会…そして死の瞬間まで分部を追っていた自分の遺影…そこに見た自分の姿とは！

ー第7話　小谷家

ー第7話　小谷家

この世界でも、非常線が張られた。
上士居中学校には、県警本部長の田島自身がやってきた。
「小谷さん…お久しぶりですと言えば良いんでしょうか?。」
頭には白髪が混じり、日焼けした顔には深いシワが刻まれている。
周りに居る警官を見ただけで、田島が指揮官として優秀である事を小谷は感じた。
「ずっと岐阜なのか?。」
「いえ。色々まわりました。まぁ定年までの最後の職場は岐阜でと希望したら、たまたま空いてまして…。この状況だと、運が良かった。事情を知らない者では、小谷さんの力になれません。…たまたま、栗林　三橋　加藤も岐阜に戻って来てるんです。三人とも腕を上げました。30年前は、ヒドかったですからね。」
「誰だってだ。お前もひどかったぞ、最初は。」
田島本部長は、少し若やいで嬉しそうだった。
「…で。小谷さん。分部はどう出るんでしょう。この後。」
「奴は、必ず拠点を確保している。この時代の雨屋をな…そこにとりあえず引いて、こっちの動きを観察する。分部のパターンだ。」
「この時代の雨屋ですか…。」
田島は素早く考えを巡らした。
「ネットカフェか、あるいはラブホテル。別の名前でアパートを借りてるか…。すでに実家は押さえてますから…。」
「それは任せる。CAを限定してくれ。」

田島は、また嬉しそうな顔になった。
「ＣＡですか…。懐かしいですね。よく言われました。ＣＡを狭めろって。」
「…とりあえず。このずぶ濡れの２人を家まで連れて行く。車は用意してくれたか？。」
「えぇ。このキーです。」
田島を車のキーを差し出した。
「それから、この中学生２人。セイヤとミクはどうする？。」
セイヤは震えているミクの肩を抱きながら言った。
「こんなんじゃ、家に帰っても親に説明できないですよ。」
「じゃあ２人も来い。…清美ちゃん、この時代の洗濯機には乾燥機が付いてると言ってたな？。」
「はい。でも、小谷さんの所は…どうなんです？。」
小谷利治が即座に答えた。
「付いてますよ。行きましょう。」
一行はプールサイドを離れた。

官舎は新しく建て替えられていた。
３階建ての鉄筋アパート…その１階の玄関で、いつものように妻は座って小谷を迎えた。
「お帰りなさい。ご苦労様です。」
１０才年下の妻は、この世界では２０才年上のはずだった。
「すまない。仕事を持ち込む。」
何の戸惑いもなく、小谷の背広を脱がせて受け取る。着替えは、すでに全員の分が揃えてあった。
女の子２人を、寝室の方で着替えさせる。洗濯機が回り始めた。
小谷は自分の仏壇を見た。白髪の自分の遺影が飾られている。
スッと仏前に座ると、手に取れる所に数珠が置いてある。明かりがすでに付いている。お鈴を鳴らして、小谷は合掌した。この自分も

また、生涯を賭けて分部を追っていた。
「警察官としては、誰にも恥じる事のない仕事をしてきたはずだ。…しかし、夫としてはどうだった。？。この写真の俺は…。」
落ち着いた美しさをたたえた妻は、柔らかい声で微笑みながら答えた。
「…生涯、逮捕した容疑者は３０人。内、２０人は再犯せず社会復帰。１０人は未だ刑務所に出たり入ったり。病室で毎朝目覚めると、１０人の名前を１人づつ唱えて、お前はやれると付け加える。…そんな人の妻で居られる事以上に、誇らしい事は有りませんでした。この写真のあなたは、恥じる事のない夫でした。…あなたも迷う事はありませんよ。今も、私が代わって唱えてるんですよ。１０人の名前と分部豊の名前。そして、お前はやれると…。」
小谷は押さえ切れずに、この３０年後の妻を抱きしめに行った。
「駄目ですよ。皆さんが見ています。」
言いながらも、妻は小谷に身を任せた。
気を使って、全員が襖を閉めて隣りの部屋に移動した。

「すごいラブラブじゃん。おじさん。」
ミクが元気を取り戻して言った。
「声デカいよ。ミク聞こえるよ。」
いけないと言う顔で、ミクは自分の口を押さえた。
「とにかく、みんな座ろう。」
小谷利治がそう言うと、クーラーの効いた居間のテーブルの周りに、思い思いに座った。

透ちゃんと清美ちゃんが、これまでの経緯を小谷利治に話した。
「責める気はないけど、なんで1人でプールに行ったんだよ？。」
透ちゃんは不満そうに、文句を口にした。

「利治を預かったって…。無傷で帰して欲しければ、ノートを持って１０分で中学のプールに来いって…。遅れたら殺すって。何かしてるヒマ無かった。」
「分部の手だよ。せめて俺に電話しろよ。」
「だから…１０分だよ?。自転車でギリギリだよ!。間に合わないよ。分かるでしょ?。それくらい。」
清美ちゃんらしくなく、気色ばんだ。ミクがとりなしに入った。
「まって、お姉さんさ～彼氏はお姉さんの事心配してんだよ～あの分部チョーヤバイよ。ナイフ突きつけたんだよ?。メッツチャ乱暴に腕つかんでさ～。ホラ跡ついてるよ。これって婦女暴行じゃない?。刑事さん?。」
まくし立てられ、話しを変えられて、清美ちゃんは呆気にとられながら言った。
「…でもあなた。真っ暗なプールで何やってたの…男の子と?。」
何を聞くの?いまさらと云う顔でミクは答えた。
「エッチに決まってんじゃん。お姉さんも彼氏とするでしょ?。」
小谷利治がレフェリーストップかけるべきだと判断した。
「ミク待て。この女の子は３０年前の世界から来たんだ。そこじゃ、高校生だってセックスしてるのは、クラスで1人か2人の時代だ。その話はそこまでだ。」
ミクがのけぞった。
「エッーお姉さんバージン?。純愛なの彼氏と?。体に良くないよそれ。」
セイヤの方が気を効かして、ミクの口を手で塞いだ。
「気にしないで…こいつとは、まだ一回やっただけだから…。」
利治がセイヤの頭をはたいた。清美と透は顔を赤くして、床を見ていた。
「まぁ。良いか悪いかは知らないが…これが今だ。受け入れてくれ。」

「それにしても…。清美さんにはお礼を言うべきだな。俺は3才だよな。だまされたとは言え、命がけで助けようとしてくれて、有難う。」
「はい。小谷刑事さんにはお世話になってますから…。」
その利治のポケットから、ファーストガンダムのメロディーが流れ出した。透が反応した。
「それ、ガンダムじゃないですか?。」
「アァ、ファーストだけど。」
利治は携帯を取り出して開くと、音楽は止まった。
「小谷です。はい本部長…。」
小谷利治が話している横で、透ちゃんは言った。
「ファーストって?。」
セイヤが答えた。
「お兄さん。30年前なら、リアルタイムでファーストガンダム見てるでしょ?。あのあと、ゼータにダブルゼータにゴッドにウイングにターンAに…。」
セイヤと透ちゃんの間に、ガンダム談義が花開いた。
小谷利治は、緊張していたが負ける気はしなかった。
ー今度はベストメンバーだぞ。ー
と思いながら…。

次回予告!
ー第8話メモリアルセンター　芸能記者から、スポーツノンフィクションライターに転身した47才の竹山透。地元のプロサッカーチームを取材に来た目の前を、分部豊が横切ってゆく!。その理由が、2部を呼び白根登(しらねのぼる)を登場させる!ついに分部は日本全体を危機に陥れる!

ー第8話メモリアルセンター

ー第８話メモリアルセンター

長良川を金華橋で北に渡った所に、陸上競技場やテニスコート、プールなどがある県営のスポーツ施設がある。数年前に未来博と云う博覧会があり、県営グランドからメモリアルセンターに名前が変わった。

岐阜にもプロサッカークラブが誕生してＪ２に昇格した。その試合を取材するために、竹山透４７才は陸上競技場に入って行こうとしていた。

それは、プールサイドの事件が起こった翌日だった。

妻の清美は妊娠３ヶ月で、気分転換の為に竹山について来ていた。

芸能記者からスポーツノンフィクションライターに成るのは、簡単ではないと思われていた。しかし、訴訟を準備していた被害者連絡会が交換条件を提示してきた。竹山が芸能記者を辞めるなら、一切の訴訟を取り下げると宣言した。週刊誌業界側の弁護団は、戦わない方が明らかに利益になると業界側を説得した為、あっさり竹山はフリーのスポーツノンフィクションライターに転身する事ができた。

初仕事は、自由契約寸前のピッチャーを取材したノンフィクションだった。彼はルーキーイヤーの不運な連打によって、恐怖心に勝てなくなった。彼を見いだしたスカウトと、可能性に賭けるピッチングコーチと共に戦う姿が描かれていた。それが雑誌に掲載され、球団の首脳陣にチャンスを与えようと云う気にさせた。そして、今年のオープン戦で無失点完投勝利した。ローテーションの一角に入り、

今季3勝をあげている。この取材の連載で、竹山は足場を固めつつある。
そこで、地元岐阜のプロサッカーチームに取材を求めようと、メモリアルセンターにやって来たと云うわけだ。

清美とスタンドの入口に歩いてゆく竹山の前を、1人の男がゆっくりと横切ってゆく。竹山は何故か、スキのない身のこなしに、その顔を見た。清美も見た。
2人は顔を見合わせて、同時に言った。
「分部豊?!。」
2人は立ち止まって、歩いてゆく分部の姿を目で追った。
分部はコンクリート壁にある、緑色の鉄扉に近づいていった。
そしてポケットから鍵束を取り出して、その1つをノブに差し込んで回した。
分部は緑色のドアの中に消えた。
「見た?。清美ちゃん。」
「見た。どうして、こんなとこ歩いてるの?。しかも普通に…。小谷刑事が捕まえたんじゃないの?」
「きっと続きが始まったんだ。今度は何をやらかすつもりだ?。」
竹山は言いながら、携帯を取り出そうとした。自然に手が震える。焦ってポケットの携帯がつかめない。その竹山に、清美が自分の携帯を差し出した。
「あ〜。」
竹山は、小谷利治ではなく田島本部長に電話してしまった。
ーはい。田島です。ー
「竹山　透です。その節はお世話になりました。」
ー!。あぁ…記者の方の竹山さん?ー
「なんか…別の竹山がいるみたいですね。…それどころじゃなくて、

今メモリアルセンターに居るんですが、分部豊が居るんです。」
ー分部が？。近くに？。ー
「FC岐阜の試合会場になってる陸上競技場なんですが…外壁にあるドアの鍵を開けて入っていったんです。」
ーう～ん。それは…。5分以内に機動隊を行かせます。見てて下さい。もし出て来たら、どこに行くか電話で知らせて下さい。くれぐれも分部に気づかれないように。ー
「分かりました。…もしかして、向こうから来てるんですか？。向こうの小谷刑事や俺や清美が？。」
ー来てます。でも問題は、そのドアです…緑色してませんか？。ー
「緑色です。」
ー絶対に中に入らないで下さい。私でも手に負えない事態になります。絶対にドアを開かないように。察して下さい。ー
「分かりました。機動隊を待ちます。」

2分で、機動隊が盾を持ってやって来てドアの周囲を囲んだ。田島本部長自身が5分後に、竹山の所にやって来た。
「竹山さん。ここを離れて下さい。」
「何故です。分部は何をするつもりなんですか？。」
「問題は分部ではなく…2部です。」
「2部？。」
「聞いた事有りませんか？。特別編成班なんでもあり課と云うのを？」
「警視総監直属の捜査チームと聞いてます。」
「えぇ。日本国内での外国の諜報活動全般に渡って、あらゆる権限を日本政府から与えられています。以前、愛知県警は捜査権をこの2部に奪われました。つまり、竹山さんに対して2部が何かを行使しても、私には手の出しようがなくなります。」
竹山は身の危険を感じた。記者としての勘も警告を発していた。
「分かりました。…行こう清美。」

しかし、2部はあまりに早かった。

「お待ち下さい。竹山さん。」
50代後半の背広の男が、いつの間にか真後ろに来ていた。
「警視庁生活安全課の白根と申します。あのドアの中に入っていった人物について…お話をうかがいたい。」
このレベルの威圧感を持った人物は記者にとって、危険極まりない人物だった。まず清美を退避させなければと竹山は焦った。
「妻は関係ないので、帰らせて頂いてもかまいませんか？。」
「問題有りません。妊娠されてるようですね。」
竹山は清美を促した。小さくーあなたーと言ったが、その場を離れた。
田島が、なんとかこの場を無事に済まそうと、間に割って入った。
竹山は芸能関係の記者で、警察関係には慣れていないはずだと…。
「白根刑事部長。県警の田島です。雨屋事件の詳細は、ご存知ですか？」
「え～。レポートを読みましたが…まるでSF小説のようでした。」
「あの事件の続きが現在進行中です。分部は向こうで服役していたらしいんですが、復讐の為に脱獄して…また、こっちに逃げて来たようです。」
「なるほど。」
「我々の落とし所は、分部を確保し向こうの世界で、もう一度服役させる事です。そうしないと、向こうの県警関係者が苦しい立場に立たされます。」
「…。それはマズイですね。脱獄犯を逮捕出来なければ、処分者が出る。…解りました。では、2部としての落とし所を言いましょう。…この緑色のドアの向こうには、旧日本陸軍の施設が地下5階に渡って広がっています。その施設を博覧会開催の工事に合わせて補修を行った。その際、各階のドアを交換した。同時に鍵も変更になっ

た。その全キーのスペアキーを工事関係者の1人が持っている事が、昨日の23時に判明しました。今日の午前3時に身柄を拘束しましたが…スペアキーを発見出来ません。本人が言うには、4年前に車上狙いにカバンごと盗まれたと…。それで困っている時に、竹山さんの携帯電話の会話を傍受しまして…ここに居る訳です。で、我々としては、スペアキーが確保されれば問題有りません。分部豊の身柄は県警にお任せします。そして、もう一つ深刻な問題が有ります。」

白根はそこで、言葉を止めた。

「…。迅速に行動したいので、かいつまんでお話ししましょう。この施設の地下5階の一番奥の部屋には、ある物が保管されています。第二次大戦中、旧ドイツ軍のペーネミュンデロケット実験場から、ユダヤ人のグループが核弾頭を盗み出しました。2個作られ、1個は地下実験で使用され成功したとの記録が有るものです。それをゲシュタポに追い詰められたユダヤ人グループが、杉浦という日本の外交官に託しました。それが日本に持ち込まれ、この施設の中に秘匿されました。」

田島は嫌な汗を全身に感じた。これは、最高国家機密に違いない。それを聞いた自分と竹山は、もはや逃れられない立場に立たされたと感じた。

「しかし…。それは古い物でしょう。もう起爆しないのでは?。」

「毎年チェックされています。今現在でも起爆可能です。スペアキーを作った工事関係者は、施設の見取り図も一緒にカバンの中に入れていました。その見取り図には、丁寧にドイツ製核弾頭と書いてあったと証言してます。」

「じゃあ、分部は知ってるんですか?。」

「おそらく…。先ほど復讐の為に脱獄したと…田島本部長はおっしゃいましたね?。」

田島は指が勝手に震えるのを感じた。

「分部のプロファイルを行ってないので、なんとも言えませんが…

本部長の感じとしてはいかがです?。」
「核を起爆させるような人物ではない…」
青ざめた竹山の顔がそれに同意して動いた。そして竹山が付け加えた。
「ですが、マスコミやネットを使って脅すくらいは平気な人物です。」
「…結果は起爆させたのと同じですが、それなら施設内部に突入しても問題無さそうですね…うちの連中１０班を全て投入します。すいません。車の無線を使います。」
白根は自分の車に戻って行った。

竹山は、分部の変な巧妙さに思いを巡らせていた。
「田島さん。こういう施設って、出入り口は一つなんでしょうか?。」
「それはわからない。もう中に居ないと?。」
「だとしたら。ネットカフェに駆け込んで、書き込めば世界中に発信できますよ!。」
田島は、自分の車に戻って行く白根に全力疾走した。
振り向いた白根に、田島が怒鳴っているのが竹山に見えた。明日、この街いや…この国が無事である保障は無くなった。自分と清美が分部を見なければ…竹山透は恐怖でその場に座り込んだ。

次話予告!
第９話ゴーケアフォーナカジマ岐阜店
分部の情報汚染を阻止せよ!小谷晴朝が利治が２部白根が!間に合うか!

ー第9話ゴーケアフォーナカジマ岐阜店

ー第9話ゴーケアフォーナカジマ岐阜店

時間は午後4時を過ぎていた。
小谷利治は分部が潜伏しそうな場所を潰している所だった。東海3県に20店舗を持つ、ネットカフェの社長に確認の電話を入れる。
「…そうですか。引き続きお願いします。」
小谷利治は携帯を切った。メモリアルセンターの核弾頭の件は伏せられていた。ただし、ブースに入れない事は申し合わせになっていた。
「いませんか…。」
三ツ矢が疲れた顔でハンドルを軽く叩いた。するとガンダムのテーマソングが流れだした。
「…はい。小谷です。来た?…どこに?。岐阜店?。ブースに入れてないでしょうね?。5分でいきます。」
「先輩。どこです?。」
「加納二丁目のゴーケアフォーナカジマ岐阜店だ。」
覆面パトは走り出し、回転灯が回った。
「どうやって、メモリアルセンターを出たんでしょうね。」
「いつもの事だ。あいつは追い詰められるが捕まえられない。それでも行くしかない。」
「今度もオヤジさんが手錠をかけてくれますよ。」
「だと良いが。」
小谷利治は本部に無線を入れたが、最初に到着するのは自分達らしいとわかった。パトカーのほとんどがメモリアルセンターに移動していた。

「オヤジさんはどこです?。」
「セイヤとミクを連れて、これから行く岐阜店だ。」
「…恐るべしですね。名刑事ってのは、運まで引き寄せるんですか?。」
「呼び合うのかもしれん。あの2人は…。」
「じゃあそうなりたいもんですね。呼び合うなら、刑事なんてたやすい仕事だ。」
「俺達には無理だ。足で稼ぐしかない。」
「ですね。」

小谷晴朝はトリプルシートで、ネットカフェなるものをセイヤに説明されていた。隣りでミクがアイスクリームを舐めている。
「…。これは、使い方によっては世の中を破壊できるな…これ専門の部署が警察に無いと危ない。」
「有るんだな。オヤジさん。電算機犯罪課ってのがさ。」
セイヤは犯罪関係のサイトを小谷晴朝に見せていた。
フロントの方で、誰かが怒鳴っている声が聞こえた。
「でさ…。」
小谷晴朝は、セイヤとミクの口を両手で塞いだ。
2人がモグモグ暴れるのを押さえながら、シッーと2人を黙らせた。
「…分部だ…何を怒ってる?。」
ー待った。わかった。4番を使ってくれー
店員が大声を出しているのが、今度ははっきりわかった。
「2人共ここに居ろ…机の下に隠れてるんだ…。」
「なんで分部さ〜ウチらのトコばっかくんの?。」
ミクが泣き声になっている。
「セイヤ…ミクを頼む。」
小谷晴朝はセイヤの肩を叩いて、ブースを出た。4番ブースの位置

を頭に描きながら、床に這いつくばって動いてゆく…。

分部は核弾頭のニュースをネット上にバラまくつもりだった。地下施設の地図に核弾頭を写した携帯の動画…。

「その前に、老いぼれ小谷に何をするか教えてやらないとな。」

４番ブースの中で、分部はニヤニヤしながらつぶやいた。

その声を小谷晴朝は、隣りの３番ブースで聞いていた。中で若い女性が居眠りをしている。

このまま、ブースの仕切りを飛び越えて、分部にダイブするつもりでいたが…その作戦に邪魔が入った。

ミクが大声で叫んで走ってゆくのが聞こえた。

「分部だよ～タスケテ～コロサレル～。」

それに被さるように。

「ミクだめだよ。オヤジさんの作戦パーじゃん！。」

と言うセイヤの声に、小谷晴朝は思わず笑ってしまった。

「老いぼれどこだ？。」

と分部の声がして、立ち上がる音がした。さらに悪い事に、利治の声が聞こえてきた。

ー何番です？ー

ー４番です。ー

それに、ミクとセイヤの意味不明なしゃべりがＢＧＭを付け始めた。

「息子もか？。」

分部はブースの仕切りをパソコンの台に乗って越えた。４番の向こうは廊下になっている。左３ｍでフロントになり、出口がある。

小谷晴朝も３番から飛び出た。小谷利治と三ツ矢に、パニックになったセイヤとミクが絡んでいる。分部はそれをユウユウかわして、出口の階段を駆け降りていった。小谷晴朝も、その背中を追った。

その瞬間。ネットカフェの全パソコンの画面が消えた。白根が最後の手段を使って、日本中のプロバイダーのサーバーをダウンさせた

のだ。
もはや、事態は深刻になりつつあった。そして分部は、ビルの非常階段から非常階段に飛び移り…ついに、小谷晴朝の視界から消えた。分部はまたも包囲網をシフトさせ、その間を抜けて行った。

次話予告！
第１０話分部射殺命令
ついに２部は射殺を含めて、分部の破壊活動阻止を県警に通告してきた！。生きて昭和に帰さなければ…分部を死なすわけにはいかん。小谷晴朝は活路を見いだせるか！。

ー第１０話分部射殺命令

ー第１０話分部射殺命令

ゴーケアフォーナカジマ岐阜店は、大騒ぎになっていた。
社長の中島勝義はプロバイダーに電話をかけたが、サーバーダウンの原因が不明の為、復旧のメドが立たないと言われていた。
小谷利治は三ツ矢と肩を落としていた。その横で、セイヤとミクが済まなさそうにしている。
「気にするな。お前らのせいじゃない。」
小谷利治は中学生を責めても仕方ないと云う感じで言った。そこに小谷晴朝が戻ってきた。
「利治、やられたな…何故パソコンが消えてる?。」
「原因は不明です。復旧のメドも立ってません。」
「そうか。するとネットカフェは消える訳だな。分部の拠点から…。」
店の外に、サイレンと共にパトカーが集まってきた。
利治の上司である三橋が駆け上がってきた。
「小谷。分部は?。」
「すいません。逃げられました。」
「バカヤロー…。」
まで言って、三橋は小谷晴朝を見た。
「えっ!。小谷さん?。でも、若い。」
小谷晴朝は、それが誰か分かった。竹山透の身辺警護をさせていた三橋達哉(みつはしたつや)だった。ちなみに、三橋未来(みつはしみく)は娘で、そっとブースの陰に逃げて行った。

「三橋か！。元気そうだな！。」
「はい。でも…利治これは？。向こうから？。」
「ウチの親父です。年はマイナス３０才です。」
三橋は、急に新人刑事のようになった。
「お久しぶりです。またお会いできて嬉しいです。」
小谷晴朝はおかしかったが、笑わないようにした。
「混乱させてすまん。三橋、息子のミスは俺が代わって謝る。」
「いえ。そんな。自分の指導力の無さです。」
「三橋。指導力なんてものを信用するな。刑事の仕事は自分でつかんでゆくしかない。教えられるなどと自惚れるな。チャンスを与え、成功するようにバックアップする。それだけだ。ミスは個々の人物の責任だ。間違うな。」
「はい。それは、何度も言われておりました。肝に銘じます。」
「それで良い。」
「それはそうと、事態が急変しています。」
「指揮系統の話か？。」
「さすがですね。…実は、警視庁の２部がこの件に出張ってきてるんです。」
「２部？。」
「３０年前なら、特別編成班と言ったら分かります？。」
「諜報関係で、警視庁が発足させるヤツだな…。令状なしで家宅捜索でき、犯人を部の判断で射殺できる権限もある。諜報関係で何が起こってる？。」
「小谷さん。今は２部に適当な部署の名前を付けて、常設されてるんです。今の名前は警視庁生活安全課２部を名乗ってます。…実は、小谷さんに判る名前だと…県営グランドの地下に、旧陸軍の施設が有りまして、その中に旧ドイツから盗まれた核弾頭が眠っていたとの事です。分部が、その施設のスペアキーを持って中に侵入したのを発見した為、包囲したんですが…ここに分部が居るとの一報が入った為に、２部が日本中のサーバーをダウンさせました。つまり、

パソコン通信を出来なくしました。」
「情報汚染か…。核弾頭の情報を流すだけで、社会は崩壊する。」
「それで…2部が時間を切って来ました。明日朝6時までに、県警が分部を確保すれば、分部を小谷さんと共に向こうに帰すと…。」
「出来なければ?。」
「2部が動いて、射殺も含めて分部の破壊活動を阻止すると…。」
「何故、6時まで猶予を?。」
「2部は、雨屋事件の詳細を知っています。そして、2部トップの白根刑事部長は、小谷さんに借りが有るとの事です。それを返したいと…。」
「なる程。俺は会った事も無いし、どんな借りかも知らんが…。こっちの小谷晴朝が、蒔いておいてくれた種だな。…あまり時間は無いが。無いよりはましだ。一度田島と打ち合わせなきゃならんな。」
小谷晴朝は、分部を想った。
「分部を死なす訳にはいかん。」
三橋も利治も三ツ矢も、その言葉にうなづいた。分部にとって、核弾頭は駆け引きの道具にしか過ぎない。しかし、彼以外の人間にとって、それは破滅を意味する。それに分部は、おそらく気づかない。手を打たなければ、確実に死が待っている。皮肉にも、小谷晴朝は全力で分部を救わなければならなくなった。

次話予告!
第11話長い夜の始まり
分部を救わなければならなくなった小谷晴朝と田島本部長…。妻の佐恵子に小谷晴朝が託した秘策とは?。

ー第１１話長い夜の始まり

ー第１１話長い夜の始まり

午後６時。北署の２階会議室に、田島本部長がやってきた。
北署の刑事全員が集合している。
「分部が射殺される事を知れば、自首してくるんじゃないですか？。」
三ツ矢が小谷利治の隣で言った。
「どうやって知らせる？。三ツ矢。」
田島本部長が聞いた。
「…。分部だけに聞かせるのは無理ですか…。」
「ラジオで流すか？。あとが大変だ。利治はどうだ？。何かないか？。」
小谷利治はイスの上で体を直して言った。
「分部の狙いは、ウチの親父にダメージを与える事です。遅かれ早かれコンタクトをとってくると思いますが…。」
小谷利治は父親の方を見た。田島も小谷晴朝の方を見て言った。
「小谷さん。さっきから黙ってますが…どうなんです？。」
「コンピューターによるネットワークへの情報汚染は封じられた。あとは、テレビラジオ週刊誌…だがすでに圧力がかかってるだろう。ならば、分部はどうするか…。」
全員が小谷晴朝に注目した。
「…核弾頭自体を持ち出して、騒ぎを起こしマスコミを集めるか…もしそれをやれば、間違いなくその場で射殺される。」
三ツ矢が口を挟んだ。

「でも…2次大戦の核って、かなり大きいんじゃないですか？。持って歩けるんですか？。」
田島が答えた。
「それは2部に聞いた。V2号ロケットの先に装着できる大きさだそうだ。大きめのポケットなら入れて歩けるらしい。もし盗まれなかったら、当時のロンドンが壊滅してたそうだ。」
「それをなんで、日本政府は持ち続けてるんですか？。ドイツとは同盟国だったんでしょ？。」
「三ツ矢。その大きさは現在でも一番小さく軽い。そのノウハウはイギリスもアメリカも持っていない。つまり、日本が世界に秘匿している技術だからだ。もっともユダヤ人グループから核弾頭を託された杉浦一等書記官は、核を同盟国であろうと使用させない為に秘匿したらしい。それが最先端技術の固まりとわかって処分されなかったと云うのが、2部の説明だ。」
「待って下さい！。アメリカに隠し事なんて出来るんですか？。」
「外交は複雑怪奇だ。密約に交換条件、公然の秘密。知っていても知らない事になっていたり…だか、この核弾頭が日本にある事は、CIAも確認できてないらしい。」
「大丈夫なんですか？。この部屋の人間全員知っちゃいましたよ。」
「外部に漏らすな。守秘義務なんてもんじゃない。漏らせば、相手とセットで消される。」
部屋中が悄然とした。
「警察庁からも、やむを得ない場合は射殺も考慮に入れて、身柄を確保せよと通達が来た。これは、日本の命運をかけた国家機密だ。分部を生きて向こうに帰すとなると…色々難しい局面に立たされそうだ。」
田島本部長は言葉を切って、部屋の中を見渡した。この部屋のメンバーは白根刑事部長が指定した者だけがいた。全て、亡き小谷晴朝の指導を受けた警察官。そして、別の過去からやって来た小谷晴朝。これは、小谷晴朝の刑事魂としか田島には思えなかった。

「だが。私の方針は、小谷さんに分部を連れ帰ってもらう。これは、小谷さんのアイデアだが、向こうから来ている末次清美　竹山透両名を岐阜城の天守に待機させる。分部を確保したら、そこに移動させる。もちろん核弾頭も確保する。岐阜県警は、４人が無事この世界から消えるまで全面サポートする。全ての責任は、この田島直樹（たじまなおき）が負うと全県警に通達を出した。同意しない者の離脱は自由だ。」

「いるんですか？。離脱者は。」

三橋が発言した。

「この部屋の中から出なければゼロだ。鈴屋署長はすでに同意している。」

一番奥の席で、鈴屋署長が立ち上がるのを小谷晴朝は見た。

「本部長には従う。極力処分者は救済するつもりだが、救いきれない事態も発生する。覚悟はしておいてもらいたい。」

小谷晴朝は鈴屋副本部長を思い出していた。

ー顔が似ているー

小谷晴朝は横に座っている加藤一二三（かとうひふみ）に顔を寄せて聞いた。ちなみに加藤星矢（かとうせいや）の父親だ。

「…署長の父親は、副本部長だったか？。」

「えぇそうです。」

小谷晴朝は、何かアクシデントが起こるとしたら、この署長から起こるかもしれない…と感じた。

「とりあえず解散する。」

田島がそう言うと、ほとんどの者が会議室から出ていった。

一人残って浮かない顔をしている小谷晴朝の所に、田島が来た。

「どうしました。何か気掛かりでも？。」

「署長だが…向こうで父親の副本部長と揉めたんだ。気になる。」

「合わないでしょうね。小谷さんとは。規則どうり、前例どおりの人物です。離脱するかと思いましたが…。読めないと言えば読めない。読めると言えば読めますよ。」

小谷晴朝は、人差し指で眉間を触りながら言った。田島が知っているその仕草は、小谷晴朝が回避が難しい危険を感じている事を示していた。
「分部は局面を変えてくる。その変わり際に対応できない人物は、立場を変える。誘爆みたいなもんだ。タイミングを間違うと致命傷になる。漏らしてはいかん相手に、情報を漏らす。」
「署長に対する情報を限定するしかないですね。しかし…分部はどう出るつもりですかね。」
「おそらく、官舎の小谷家だな。」
「佐恵子さん?。誰か行ってるんですか官舎に?。」
「必要ない。佐恵子は格闘家だ。それに、さっき2部の白根刑事部長と佐恵子に、作戦を頼んだ。」
「いつの間に?。…しかし、お年寄りですよ!。誰かいないか〜。」
田島は会議室を飛び出して行った。

その頃。
分部は、ピザ屋の店先にキーを付けっ放しにしてある宅配バイクを見つけた。
ステップの上にヘルメットが置いてあり、それを何食わぬ顔でかぶるとエンジンをかけた。
ジャンパーの右ポケットの膨らみは、核弾頭だった。
加納からＪＲの高架をくぐり、神田町通りを北上する。
パトカーがすれ違うが、気づかない。
やがて、道は右にカーブして岐阜城の下の岐阜公園に出る。そこから北に長良橋を渡り、北署職員官舎に向かった。
官舎の敷地内に入ろうとすると、年配の女性が分部を手で止めた。

「ピザ屋さん。待って下さい。」
分部はピザ屋を装って答えた。
「あーすいません。小谷さんに宅配なんです。」
女性はニッコリして言った。
「分部さん。2部の刑事さんが銃を構えて待ってますよ。すぐに岐阜城の天守閣に行って下さい。清美さんと透くんが、ノートを持って待ってます。」
「……。あんた誰だ?。」
「小谷晴朝の妻です。分部さん、行きなさい。生きて帰るんです。」
「銃を構えてるって何だ?。」
「その右ポケットの膨らみは核弾頭かしら?。それのせいで、あなたに射殺命令が出てるのよ。急ぎなさい。」
「何で教える?。」
「小谷から伝言です。分部を死なす訳にはいかん…と。」
佐恵子は優しい目で、分部を見つめた。
「あなたならやれますよ。刑務所に戻って、立派に更生できます。」
分部は佐恵子を見たまま、言葉を発しなかった。
そして、佐恵子の言った事を確かめる為に、官舎の敷地内に正面からバイクで突っ込んで行った。

建物の影に、銃を構えた背広姿の男がいた。木の影にも…。
「クソッ。マジかよ〜。」
分部は敷地内を抜け、官舎の裏口から飛び出た。
ー分部だ。追え。ー
と誰かが叫んでいる。もはや岐阜城の天守に行く以外に道は無かった。

次話予告!

第１２話公安　久利坂

２部の天敵警視庁公安トップの久利坂登場！。小谷編最悪のラスボス！事態は、県警　小谷　分部　２部対　久利坂の戦いに！

ー第１２話　公安　久利坂

ー第１２話　公安　久利坂

「部長。小谷刑事の読みは当たりましたね。」
司老（しろう）　正孝（まさたか）が、安全装置をかけたままの拳銃をホルスターに収めながら言った。
「…これで、分部は素直に小谷さんの所に行くと良いが…。しかし奥さんもやるな。合気道の師範だそうだ。」
「勝負してみますか？。元柔道日本代表候補として。」
白根は、わざと何？と云う顔をして見せた。
「何を言うか。それは武を汚すものだ。小谷佐恵子師範に対して失礼だぞ。司老。」
「すいません。」
司老は頭を下げて見せた。
「しかし部長。６時まで後１１時間…たどり着けますかね、分部は。」
「公安が本気で動いている。陸自も部隊を出したようだ。イギリスとアメリカの特務に感づかれる前に、何とかしたい所だな。」
「感づいてるでしょう。でも感づいてない振りをしてくれてる…じゃないですか？。」
「駆け引きは有るさ。貸し借りもな。だが長引くとそれも出来なくなる。６時までが限界だ。」
「相方の山際さんは？。」
「その言い方はやめろ。常盤一平（ときわいっぺい）が、Ｊ部隊の件で引きつけてる。俺の姿がないから、気づくのは時間の問題だが…それまでに終わら

せないと、山際に食いつかれたら厄介な事になるぞ。」
「クライムズの時も大変でしたよ。本まで出されちゃいましたからね。」
「結構面白かったがな。」
「買ったんですか?。部長も?。」
「それが仕事だ。」
「私も仕事で…。まぁしかし、伝説の小谷刑事の仕事を、この目で見られるとは思いませんでした。どうやるんでしょう。見当もつきませんが。」
「ファンタジスタだな。そういう意味では、分部も同じか。」
白根は、戻ってくる小谷佐恵子の姿を見ながら言った。

佐恵子は、ゆっくりと白根に近づいて来て耳打ちした。
ー公安の久利坂さんですよ。気をつけてー
白根は顔色を変えないように努力した。公安トップの久利坂(くりさか)本人が、現場に居る事自体が公安の本気の現れだった。
そして、分部が現れたこの場所に来ていると云うのは…白根にとって赤信号だった。グレーの背広に、頭は五分刈りと云うチンピラのような容貌をしている。公安の中でも異色の人物だ。しかし、弱冠21才で公安トップに立ち、以後10年間だだの一度もミスがない。そして、2部はイージス艦機密漏洩事件で、久利坂に潰されかけた過去がある。今回は分部と云うより、この久利坂が白根にとって最大の問題だった。
ーそれにしても。現れるのが早すぎる。ー
白根は嫌な汗が出るのを感じた。
佐恵子は白根に耳打ちすると、そのまま官舎の中に入って行った。
久利坂は闇の中から、スッと現れた。
「白根刑事部長。分部の死体はどこです?。」

いきなりストレートを打ち込んでくる。小細工は通用しない。
「まだ生きてます。光速ピザと云う宅配業者のバイクで逃走中です。」
「光速だったから、撃てなかったか？。司老刑事？。銃声がしなかったぞ…。」
下から舐めるような視線で、司老を舐めまわし始めた。
「うまく射線を消されました。ポジション取りのミスです。申し訳ありません。」
司老は本当の事を言った。ただし、それは意図しての事だったが…。
「左のルートを抜けられたか。確かに、下見もしてないのに左を抜けた分部の勝ちか…。甘く見たと言いたいか？。司老刑事。」
「その通りです。」
「素直だな…2部にしては。イージス艦の時は山のような小細工で楽しませてくれたのに…。妙だ。」
久利坂は白根を見ない。司老を睨みつけている。
「まさかとは思うが…逃がすつもりか？。白根刑事部長。」
見ているのは司老だ。
「公安の久利坂さんが確保して頂ければ問題ありません…」白根は久利坂の対決心を削ぎにかかった。
「…わざわざ現場に降りて来て下さっているのに、我々が邪魔をしては失礼かと？。」
白根は久利坂を見据えた。気合い負けすれば、全てが予定通りに行かなくなる。久利坂もその視線を受けて立った。どちらも目をそらさない。司老は、この落とし所がどこに落ちるのか測りかねていた。

そこに横山が駆け込んできた。この横山（よこやま）　優（まさる）は公安出身で、白根が引き抜いた人物だった。もちろん、状況はわかっていない。
「部長…これは久利坂さん。お久しぶりです。」
久利坂は、この緊張感の無い言葉に気合いを失った。

「…横山か。楽しそうだな。公安より2部の方が居心地がいいか？。」
「いえ。どちらも任務です。違いは有りません。」
「お前の仕事振りは知っている。俺には見る目が無かったようだ。今なら公安に戻って来ても良いぞ。」
横山は役立たずと罵られた日々を思い出さずにはいられなかった。
「…いや。やはり自分は、公安では役に立ちません。自分はやり方が自分流過ぎます。2部は逆に、それを求められます。」
久利坂は、ホウと云う顔をした。
「それに気付いたとは、たいしたもんだ。ますますお前が欲しくなった。2部が潰れたら、いつでも帰って来い…歓迎する。」
横山は、わずかに怒りを顔に走らせたが、すぐに消した。
「2部は潰れません。白根刑事部長がいる限り。」
久利坂は、急に吹き出して笑顔になった。
「横山。それは確かだ。良い上司に巡り会ったな…お前がうらやましいよ。じゃあ退散するか…。で…。末次と竹山ってのが岐阜城天守閣に登ったのは…分部とどんな関係があるのかな…うかつだな、県警は。」
2部の3人を凍りつかせて、久利坂は背中を向けて歩き出した。
「陸自の特殊部隊が天守閣周辺に展開するそうだ…これは機密だが。行くと撃たれるから行かない方が良い。もっとも、天守閣ってのがフェイクの可能性もあるがな…。」
久利坂は闇に溶け込んでいった。

「何もかも知ってるな…久利坂は。」
白根は、下に落ちている小さな石を見た。それを拾い上げると、その石に向かって言った。
「久利坂さん。盗聴機ってのは、対象を常にカバーしないといけませんよ。背広の真後ろの襟に付いてるヤツみたいにね。」
司老が少しあわてた。

「せっかく付けたのにバラしちゃ駄目ですよ部長。」
白根は、その石コロ盗聴機を唸っている冷房の室外機の上に投げ上げた。
「司老。どう頑張っても公安とは五分五分だ。負けはせんが、勝つ事もかなわん。天守閣がフェイクだとは…一体どうやって探り出したんだ?。」
「部長。大抵は漏らしてるヤツがいます。小谷さんは知ってるでしょう。…でも分部は天守閣に行ってしまう。捕まえなけらゃならない。上に行く前に。」
「それも考えてるようだ。小谷刑事と話した限りでは、サーカスみたいな離れ業に思えるが…。まぁこの事件。最初からサーカスを見るようではあるがな…。」
白根は、遥か南にライトアップされている、岐阜城を見た。司老も横山も、不安そうにそれを見た。

次話予告!
第13話道三隧道
ついに久利坂の拳銃が分部を捉える!間一髪間に合った小谷　白根
司老だったが…。天守閣に向け、脱出劇が開始される!

ー第１３話　道三隧道

ー第１３話道三隧道

「そうか…。済まなかった。君が妻で良かった。」
小谷晴朝は、田島の携帯で佐恵子に首尾を聞いた。
隣で田島が、かなわないと云う顔で見ていた。
「一般人にしておくにはオシイ逸材ですね…。でっ…分部は天守閣に向かったが、そこはスナイパーの射的場。どうやって止めるつもりです？。」
「道路上を逃げ回れても、長良川を南に越えるのは不可能だ。公安なら、橋は完全に封鎖してるだろう。公安を橋から動かす為に、分部はまた揺さぶってくる。おそらく…ヤツの次の拠点はここだ。」
小谷晴朝は、机の上に広げた地図の上に、人差し指を置いた。田島がそれを見る。
「鷺山城跡ですか…。何故？。」
「我々の最も人数の薄い場所だ。金華山を中心に長良川沿いに円形にラインが出来ている…その外側になる。」
「しかしここは、パトロールさせてますよ？。」
「無駄だ。分部の方が上だ。鷺山に行く。俺の車で長良川を越える。」
田島はしばらく黙った。
「公安を騙せますか？。」
「やりようは有る。向こうに帰れば、こっちの公安は関係ない。」
「あの覆面パトは、防弾板が入ってます。公安のリボルバーなら通りませんが、陸自のライフルは保証出来ませんよ。」

「肝に銘じよう。」
小谷晴朝は、田島に右手を差し出した。田島はその手を両手で包んだ。
「ご無事で。向こうの私をよろしくお願いします。」
「わかった。」
「それから…。この仕事は経験を重ねても、一向にこうやれば良いと云うものが得られません。何か方向性は無いものでしょうか？。」
小谷晴朝の目が鋭くなった。
「どの星を目指して歩けば良いかを知りたい訳だな？。」
「たどり着く必要は有りません。たどり着けないでしょう。しかし…目指す星は必要でしょう。後に続く者達にも…。」
小谷晴朝は間を置いた。
「愛する事だ。」
「愛する？。」
「愛するまでに犯人の人間性を理解すれば、刑事なんてたやすい仕事はないぞ。田島。…しかし、凶悪な犯罪者を完全に愛する事などかなわん。だが、９９，９９…％と１００％に限りなく近づく事はできる。それが、我々の目指す星だ。」
茫然とする田島の肩を叩いて、小谷晴朝は北署を出た。

分部はピザ屋の宅配バイクで、官舎から高富街道を南下し、長良北町交差点から右折した。このまま行けば、鷺山本通りに入り鷺山が見えて来る。交差点に居る県警は、分部がピザ屋のバイクに乗っている事を知っており、ライトを振って
「行け！。」
と指示した。
「世の中は不思議だ。生きてれば色んな事が起こりやがる。」
分部は呆れた顔で、開けられた検問を通過していった。

勝手知ったる脇道に、鷺山に向かって右折した。
その右折した道の正面ド真ん中で、鈴屋署長の漏らした情報を元に、久利坂は独り拳銃を構えて立っていた。

分部は避けるつもりは無く、久利坂に突っ込んで行く。
宅配バイクは屋根まで１ｍはある。久利坂は、分部がひるまないと見ると、この高さを跳躍して屋根でステップし、体をひねりながら空中で、バイクに向かって一弾目を放った。
偶然なのか必然なのか、エンジンのどこかにヒットして、シリンダーを止めた。
久利坂は着地して、ユウユウ立ち上がり、射殺するために、もう一度狙いを定めた。
分部はハンドルに胸を打ちつけて、ヨロケながらバイクを降りて、逃げようとした。

そこは、住宅街の細い交差点の南側。
西側から小谷晴朝の車が運転席のドアを開けて入ってくるのと、久利坂の後ろから白根と司老が走って来るのが同時だった。
司老は、磁気嵐発生装置を左手で久利坂にかざすようにして、発生スイッチを押した。（クライムズクライシスー第１１面襲撃最終ページ参照）
しかし…久利坂の人差し指は体が硬直しながらも、トリガーを絞りきった。
分部の右足首を狙った銃口は、わずかに左にブレ、更に上にブレた。
銃弾は右足首から外れて、左モモ外側の皮膚をえぐって貫通した。
分部は倒れ込むように、小谷晴朝の運転席に飛び込んで来た。

白根は、失神して倒れた久利坂の耳から外れたイヤホンから流れる無線を聞いた。
ー久利坂キャップ。3分でそちらに到着しますー
見ると、小谷晴朝は分部を助手席側に押し込んで、発車しようとしていた。しきりにキーを回しているが、セルの音さえしない。
「有効射程範囲に入ったようです。我々の車で行きましょう。」
司老が叫んだ。
それに答えたのは分部だった。
「…このまま、鷺山の太子堂に…。」
「太子堂に何がある？。」
小谷晴朝が聞き返した。
「…脱出口だ。連れてゆけ…。」
小谷晴朝は車から降りて、分部を車から引きずり出した。その足に素早く司老が、止血するためにズボンの上からテーピングを始めた。
「…お前ら。まるでリハーサルしてたみたいじゃないか。」
そう言う分部に白根が言う。
「3分で公安が来る。その脱出口とやらに押し込んでやる。急ぐぞ。」
小谷晴朝が肩を。白根が腹を。司老が足を持って駆け出した。
「太子堂は鷺山の頂上です。」
小谷晴朝は、後ろの2人に叫んだ。

鷺山は山と言うより、丘のようだった。
その頂上に、太子堂と云う御堂がある。分部と3人はその前までやってきた。
「入口はどこだ分部！。」
「御堂の裏だ。」
分部を御堂の裏に運んでゆくと、分部は降ろすように言った。
「小谷。俺を抱えた状態で、そこの埋まっている石の上に立て…。」

見ると、ひときわ大きな埋石が2つ並んでいる。小谷晴朝は、言うとおりに分部を抱えて、その石の上に立った。
驚いた白根と司老の顔が上に飛び去った。つまり、小谷晴朝はそのまま下に3m近く降下した。
「これは…。どこに通じてるんだ分部?。」
「出たり入ったりしながら天守閣までだ。まず、そっちの穴に行け。これは元に戻るぞ。」
上に居る白根と司老には、そけまで聞こえた後、降下した地面はまたせり上がって元に戻った。
司老はもう一度石を踏んだが、何も起こらなかった。白根は、怒鳴り合っている公安の声が近づいて来ている方を向いて、どうかわすか考えていた。

穴の中はヒンヤリとしていた。上から太子堂の中の蛍光灯の光が見える。
「太子堂の床の隙間か…。」
「これが何だかわかるか…小谷のオヤジ。」
分部は苦しそうに言った。
「お前が非常線を突破できたマジックのタネだ。」
分部は奥を見た。
「道三隧道(どうさんずいどう)。俺の爺さんが、長年の研究の果てに見つけた。」
隧道(ずいどう)はトンネルの日本語だ。
「そうなのか。30年前にはまだ発見されてない訳だな?。」
「いや。今も公式には発見されてない。」
「今も?。」
「古文書には道三隧道とあるが、道三の時代以前に…これは存在していたと爺さんは言ってた。土岐氏がここで守護職になる以前。土を掘り下げ掘のようにして、その中に石組を組み、土を埋め戻して

作られた。見ろ。何百年も昔に組まれた石組なのに…カミソリ一枚どころか、水も染み出していない。この入口の上下する仕掛けは、道三の時代の物らしい。」
上から、白根と誰かが言い争っている声が流れてきた。分部はポケットからペンタイプのマグライトを差し出すと、小谷を促した。

刑事は逃亡犯に肩を貸しながら、石組の中を進み始めた。
「換気はどうなってる?。」
「作った当時の物もあるが、爺さんが直したものや新しく作り直した物もある。そこから太子堂の床に風が通るように作ってある。」
「何故こんな凄い遺跡が未発見になってるんだ?。」
「二次大戦前。旧日本陸軍は長良橋の下に地下通路を造ろうとした。偶然道三隧道を発見した。軍は遺跡に興味は無く、南から伸ばしてきた地下通路をそのまま繋いで北に伸ばした。その瞬間道三隧道は軍事機密になった。道三隧道について書かれていた古文書は全て回収され、爺さんの研究も禁止された。もちろん探す事などもってのほかになった…。」
「それでもやめなかった…?。お前の爺さんだとしたら?。」
小谷晴朝は少し笑いながら、分部の表情を盗み見た。
「…特別高等警察って名前の連中が、爺さんを見張っていたらしい。爺さんは俺の親父を使って、鷺山を調べさせた。昭和２０年５月３日。太子堂の裏を５０Ｃｍ掘り下げて、さっきの石を見つけた。」
「その頃から警察とはライバルか…。遺伝子だな、分部家の。」
分部は初めて小谷晴朝の顔を見た。
「…かもしれん。」
その言葉を聞きながら、石組の通路が前方と左に分岐しているのが、ライトに照らし出された。
「どっちだ?。」
「真っ直ぐだ。岐阜城に行くのに北は有り得ない。」

「じゃあ、この北の通路は何処へ？。」
「北に何キロか行った所にあった大桑城に通じている。ただ、換気口が修理されてない。行くのは無理だ。」
延々と2人は歩いて行った。小谷晴朝は腕時計を見た。
２２時３０分。
石組ではないコンクリートの壁が正面に現れた。
「ここは爺さんと2人で、コンクリートを割って開けてある。上手く偽装してあるだろう？。この先が長良橋の下になる。」
「軍は大丈夫か？。」
「この長良橋の下を含めて、岐阜駅周辺以外の旧日本陸軍の通路は使われていない。入口は塞がれて、崩落している所も多い。ここは長良橋の基礎だから、点検やメンテナンスが行われているが…点検があっても滅多にここまで降りて来ない。」
分部に代わって、小谷晴朝は窪みに指を入れて、人ひとり通れるだけのコンクリートの塊を手間に引きずり出した。
小谷晴朝は先に入って、分部を引っ張り出した。
「すぐ正面に蛍光灯のスイッチがある。…少し休ませてくれ。」
小谷晴朝はマグライトで現代のスイッチを見つけると、点検用の照明をつけた。
真新しいコンクリート壁のトンネルが照らし出された。

次話予告！
ー第１４話伊奈波山北洞　道三隧道の中で、次第に分部の気持ちが変化を見せ始める。小谷晴朝の人間愛は分部を変えられるのか？。それとも…。犯罪者キャラクターを更生させる。作者のこのチャレンジは果たして成功か？失敗か？

ー第１４話伊那波山北洞

ー第１４話　伊那波山北洞

司老のテーピングは、傷口の出血を完全に止めていた。しかし、傷口からの細菌感染は発熱を生じさせていた。

「傷はどうだ？。」

「我慢できなくは無いが…この先、護国神社でいったん外に出て次の入口まで１０ｍくらいある。そんな調子で出たり入ったりして、伊那波山東洞（いなばやまひがしぼら）まで山登りだ。もつかどうか…。」

「東洞か…。分部、ここで待っていると云う手もある。２人を自分が連れてこれば良い。今は…２３時１０分。朝の６時まで７時間５０分ある。」

分部は少し考えていた。

「いや…。俺の勘だと、足を撃った奴がルート上のどこかで待ち伏せていそうだ。あんたは戻って来れない。」

分部の勘はあなどれない。

「なら、もうひとつプランがある。もしもの時の為に打ち合わせておいたんだが…。」

「あんたらしい。そう来ないとな…。」呼び方が老いぼれから小谷に…そしてあんたに変わった。

「もし朝５時までに、天守に我々が現れなかった場合。鶯谷高校（うぐいすだに）の学生会館まで降りてくるように指示してある。さっきの伊那波山東洞にそいつが建ってる。出口から近いかもしれん。」

「近いも何も、学生会館の裏にある大木の脇が出口だ。そこまでは山登りじゃない。もっとも緩い登りだがな。」

「そこまで行けそうか？。」
「楽勝だ。だが朝５時まで待たなきゃならない。」
「５時から２人が降りて来るまで３０分。リミットまで残り３０分。そこで鍵束と核弾頭を置いて、我々はこの世界から戻る。」
「…いや。３０分は残らない。あの男は、最後の１秒まで食らいついてくる。」
「心配ない。どんなに優秀な奴でも、お前を追い詰める事はできる。しかし捕まえる事はできん。」
「今度ばかりは…。まさか、いきなり撃ってくるとは厳しい。」
「致命傷にはならん。」
サラッと言う小谷晴朝の言葉に、思わず分部は振り返って笑った。初めて見る分部の笑顔だった。
「根拠は？」
「射殺するなら…頭か心臓を狙うはずが、右足首を狙っていた。発砲して犯人を殺した事の無い証拠だ。どうしても、急所を初弾では撃てないものだ。それに、射殺した事のある人間の目は、あれほど澄んでない。必ずくもっている。」
「驚いたな。あの短い時間にあの距離で、目が澄んでいるかどうか見分けたって言うのか？。」
「視力は２，０ある。短い時間で相手を知るには目を見るしかない。だから、自分はお前を捕まえられたんだ。」
分部は、この刑事の底知れなさに身震いした。
「俺はどんな目をしてる…？。」
「犯罪を犯し、それを悔やんでいる。しかし、その気持ちを警察に対して復讐する事で、消し去ろうとしている。」
「俺が？。悔やむ…。まさか。」
「認めなくて良い。悔やんでも解決にはならない。それより、明日を真っ当に生きれば良い。真っ当に生き抜く事が、被害者に対する最大の謝罪と思え。」
「それで許されるか？。」

「許されん。だが犯罪者が犯罪を犯さないで生きようとする気持ちは貴く稀だ（たっとくまれ）。それは被害者であっても…許さないまでも敬意を払うべきだ。そうしない者に対しては、礼儀に反すると批判して構わん。」
分部は首を捻りながら笑い出した。
「言いきるんだな。だが…俺はこの先、犯罪を犯さない自信はない。最初は復讐だった。だがな、やってる内に快感になった。その内にやりたい衝動に駆られるようになった。真っ当な人間に戻れるとは思えない。すまんな…。」
「知ってるか分部。鞭で打たれながら、褒められたり快感を与えられると、自ら鞭を欲するようになる。復讐をしていると云う快感が、犯罪と云う嫌悪すべき行為を欲するようにさせたんだ。逆をやれば良い。戻れない者など居ない。」
「だったら。刑務所は何故それをしない。真っ当に生きる快感なんか与えられなかったぞ！。惨めさと屈辱と苦しみだけを毎日与えられた。」
「人任せだからさ。誰かに言われて真剣にやれる者など居ない。自分で這い上がろうと思い続けられる者にしか、犯罪の海から浮かび上がれん。」
「そう思い続けられるにはどうするんだ。」
小谷晴朝は否定的で無い分部を感じて言った。
「どうするんだ。どうすれば良い。そう思い続ければ、答えはお前の目の前に舞い降りてくる。それなら出来るだろう？。」
「…そんな事。それで今の俺から逃げられるとは思えない。」
「強制するつもりはない。唱えてみろ。今日俺はまともに成る為にどうするんだ。どうすれば良い。その気持ちが足場を固めてくれる。その気持ちに誰かが共感してくれる。その日まで唱えてみろ。逃げる必要などない。」
「もう少し気の効いた事を言え…。」
分部は、そうは言ったが…気持ちは揺らいでいた。

ーコイツの綺麗事に騙されても良いんじゃないかー
と…。

２人は０時頃に立ち上がると、長良橋地下のトンネルを南に歩き、再び壁のコンクリートを引き出し道三隧道に戻った。
金華山の北西。長良川との間に護国神社がある。ここでいったん、その敷地内に出た。小谷晴朝にはそれが神社のどこになるのか、暗くて判断出来なかった。
「こっちだ。」
と言う分部の誘導で、１０ｍ先程先の埋石に再び両足を乗せた。降下すると、同じ石組のトンネルが再び現れた。
「ここは。岐阜公園の下を通って、松山町の自福寺境内に出る。」
「…。分部。爺さんは何故これを公表しなかった?。日本が敗戦すれば軍も関係ないだろう?。」
「同じだ。地下は今も機密だ。」
「爺さんはどうなった?。」
「道三隧道は、このメインの通路のほかに、岐阜の街の下を縦横に走っている。その全部が刻まれている地図の間を探しに入っていた時…ある日爺さんは帰って来なかった。今もな。」
「印(しるし)を付けなかったのかな…お前が判るように。」
「ある。たが今の俺では…爺さんに合わす顔がない。」
「気にするな。爺さんは解ってくれるさ。」
「そう思うか?。…いや何でもない。」
分部は打ち消したが、小谷晴朝は分部の変化に気付いた。

２人は自福寺と云う寺の境内に出て、また１０ｍ離れた所から降下した。
再び出たのは、伊那波神社の拝殿の裏山だった。暗闇の中に、建物がうっすら浮かんで見えた。

「この神社は、道三の時代には別の場所に建ってた。城が造られた時に、この場所に移された。ここは岐阜城の弱点だったと言われている。」
小谷晴朝の記憶からすると、警官の配置の内側に2人はすでに入っていた。
「分部。道三は最後に戦った時…この地下通路を何故使わなかったんだ？。」
（詳しくは司馬遼太郎刊　国盗り物語を参照して下さい）
「逆だ。城方が地下を使って道三を攻めた。爺さんによれば、道三の首はこの地下通路の地図の間に置かれ…入口は石組で閉じられたらしい。そのあと信長が岐阜城を攻めた時、秀吉は地図の間から書き写された絵図を手に入れていた。それで城は陥落(おちた)。裏の崖を登ったと云うが…あの崖は岩がもろくて登る事はできない。」
小谷晴朝は分部を見た。
「分部どうだ。向こうに戻って刑務所を出たら、地図の間を探さないか？。自分達が助かるのだとしたら、爺さんのおかげだ。自分達が見つければ、爺さんは死なずに済む。恩返しだ。」
分部はハア？と云う顔をした。
「印しが有るんだろ？。」
「３０年前に戻ったら無い。」
「コイツは、爺さんのだろう？。」
小谷晴朝はマグライトを横に有る石碑にかざした。

分部豊地文字否
豊文字肯

とだけ刻まれた文字が浮かび上がった。
「これは…地と云う印しではなく、豊と云う印しをたどれじゃないのか？。」
「この石碑はいったい？。」

2人は石碑の反対側に回った。
伊那波曲輪跡(いなばくるわあと)
と有り、その下に分部　利佐ェ門建立と刻まれていた。
「爺さんの名前だ。こんな所に勝手に建てたのか？。」
驚いている分部に小谷晴朝は言った。
「行こう。」
2人は少し離れた埋石に乗った。

降下して歩くと、すぐに文字が有った。天井の石が一列だけ下がっていて、それに

地

と刻まれていた。小谷晴朝は、その文字の上にマグライトを動かした。

豊

と文字があり、その上をさらに照らすと、ポッカリ通路が口を開けていた。そして足元にも深い穴が開いていた。照らすと、底にミイラ化した人間が見えた。
「爺さんだ。トラップなんて無い通路なのに…ここだけ。」
「戻ったら、このワナは埋めよう。爺さんが死なないようにな。」
2人は死体に向かって合掌した。
「何か台がないと、上には登れそうにない。」
「ハシゴがいるな。」
2人はその場所を飛び越えて進んだ。

１００ｍ程行くと、行き止まりになり、埋石が２つ待ち受けていた。
「この上が学生会館だ。まだ…３時２０分。上に出るには早い。」
「待つしかない。」
２人は暗闇の中で、朝の５時３０分を待った。

次話予告！
ー第１５話金華山
天守閣の清美と透が陸自に拘束されるのを防ぐ為、２部の３人は金華山に向かった！。３人は陸自の展開する山頂に登ろうとするが…。

ー第１５話金華山

ー第１５話金華山

時間はさかのぼって９時。
白根は公安と鷺山の上で揉めた。久利坂は、気絶した原因が不明な為病院に搬送されていた為、部下を丸め込むのは簡単だった。
司老と共に、横山が待機している車まで降りて来た。
「部長。どうなったんです？。」
「横山。２人はここを抜けた。行くぞ。」
促されて司老を車に乗せ、白根の車の後ろに続いた。
「司老さん。この先は？。」
「…久利坂キャップが目覚めるのは、２２時くらいだ。そこから勝負になる。」
「６時まで８時間もありますよ。」
「２人は見つからん。それより天守閣の２人だな…うまくやれるかな。」
「陸自が居るんでしょ？。拘束されませんか？。」
「されんようにする。」
「どうやって？。」
「俺達がやるのさ。田島本部長によると、朝の５時に分部と小谷さんが天守に現れなかったら、鶯谷高校学生会館の裏まで降りてくる事になってるらしい。分部は足を撃たれてる。天守まで登るのは、あきらめるはずだ。」
「もう一度聞きます。どうやって末次清美と竹山透をソコまで降ろすんです？。」

「再びコイツだ。」
司老は磁気嵐発生装置を持ち上げて見せた。
「公安に続いて、陸自にもですか？。」
「レンジを最大にする。半径５００ｍまでならカバーできる。」
「上のヘリが堕ちたりしないですか？。ウチのも飛んでますよ…。」
「水平に５ｍ幅だ。まぁ…地形によって有効範囲がどうなるかは不明だがな。」
「５０ｃｍだって近ずきたくないですよ。」
司老はそこで笑って見せた。
「俺はコイツを使い竹山透を背負う。お前は末次清美を背負う。それが任務だ。」
「白根さんは？。」
「久利坂キャップをマークする。」
横山の目が厳しくなった。
「来ますよ…。あの人は。そういう人です。」
「頼もしい。日本の公共安全は保障されてるな。」
二台の車は検問を通過しながら金華山に向かった。

道三隧道は、鶯谷高校学生会館から上加納山の下を通り抜け、旭見ヶ池町の善照寺に出る。そこから降下すると、尾根を挟んで岩戸公園の岩戸観音（いわどかんのん）に出る。そこから北釜ヶ洞を登り、展望台下に至り、登山道の地下を天守閣まで続いている。天守閣は再建されたもので、県警の警官が中で清美と透を守っていた。もちろん、２人が居る事は伏せられている。ただし、公安同様に陸自も無線傍受と情報解析ですでに知っていた。
天守閣の外に出ないように、警官４人は陸自に警告されていた。
「出ると撃たれますよ。」
と…。

白根と司老　横山は岐阜公園に行き、陸自の司令所に入った。そこで、司令官と3人は同時に息を呑んだ。
「これは白根刑事。司老刑事に横山刑事も。何年振りですか？。」
南3佐が、白根に右手を差し出した。（クライムズ　クライシスー第15面ギフタワーマンション以降を参照）。
「まさかですな。お互いに。南3佐。」
「その節は、勉強させて頂きました。」
「いや。任務とは云え…南3佐には失礼な事を…申し訳ありません。」
「失礼はお互い様です。で…ご用件は？。」
相変わらず南3佐は、事務的だった。
「ロープウェイで山頂まで行かせて頂きたい。現在山頂は陸自がコントロールされていると聞きましたが？。」
「部隊が展開しています。任務で登られる？。」
「もちろんです。」
「動かしましょう。2部のエースが応援に入って下されば心強い。公安のエースは分部にやられたとか？。信じられません…。」
南3佐は薄々白根の仕業だと感じているようだった。
「…とにかく、識別タグを着けましょう。狙撃手のスコープに表示が出るので、間違って撃たれるのを防げます。ただし、流れ弾があります。これは避けてくれないので、銃声がしたら伏せるようにお願いします
「ありがたい。」
「野中3尉。2部のトップチームを山頂までご案内してくれ。」
後ろにいた副官が進み出た。
「はっ。司令。ではこちらに。」

野中３尉の案内でロープウェイに乗り込み、山頂に向かった。白根は、陸自が簡単に上げてくれた事に意図を感じていた。しかし、何があるにしても頂上まで上がる事の方が重要だった。
野中３尉はギフタワーマンションの地下５階で戦った人物だ。お互いに覚えてはいるが、ロープウェイの中で野中３尉は話しかけないし、白根達も言葉を発しなかった。
山頂駅に到着すると、野中３尉が先頭に立って天守まで登って行った。
天守閣の入口に警官が見えた。
「天守は県警の管轄となってます。後は県警の指示に従って下さい。識別タグをくれぐれも外さないように。撃たれますよ。」
野中３尉は念を押して下って行った。

県警の警官は、３人を助かったと云う顔で迎えた。
「助かります。２部は味方と聞いてます。」
「時間制限付きだがな。」
「それでも心強い。」
警官は、３人を天守閣の事務室に通した。
１０代の青年２人がパイプイスに座っていた。
「清美さんと透くんだね？。２部の白根です。」
この２人の３０年後の姿を、メモリアルセンターで見た事を白根は思い出した。
「こんばんわ。そうです。」
透が答えた。
「予定が変わった。」
２人はうなずいた。
「時間が来たら下山する。それまで待機になる。」
「大丈夫ですか？外は？。」
白根は安心させる為に笑って見せた。

「２部が保障する。心配ない。」
しかし。
南３佐は、識別タグのマイクから拾ったこの会話を聞きながら、天守閣に居る全員の拘束命令を出そうとしていた。

その頃。不安を抱いた田島本部長は、小谷利治に道三隧道で分部と父親を追いかけるよう指示していた。入り方は白根が部下を使って田島本部長に知らせていた。太子堂御神体の目のまぶたがロックになっている事を司老が突き止めていたのだ。
午前２時に、小谷利治は太子堂の裏から、懐中電灯を持って降下した。
その小谷利治の耳のイヤホンに、陸自の動きが伝えられたのは午前３時３０分過ぎ。
公安も、陸自と県警２部が動くのと同時に動いた。

次話！
ー第１６話岐阜城脱出に続く！

ー第１６話岐阜城脱出

ー第１６話岐阜城脱出

白根は山頂駅から登って来る時に、金華山の石に似せた盗聴器を、司老や横山にもバラまかせていた。その音がイヤホンの中で、パターンの違うノイズを発した。識別タグは外して、冷蔵庫の中に入っている。

「司老出来るだけ引きつけてからだ。」
「近い方が効果がありますからね。」
「３００ｍソコソコの山だ。南３佐までやってくれるさ。」
「それはどうですかね。」
ノイズは集まり始めた。
ー集合ー
と白根は聞いた。
「わざわざ教えてくれるとは…。司老…下山スタートのゴングだ。」
「了解。行きます。」
その声の後、岐阜城を照らしていたライトも、岐阜公園の電灯も全て消えた。南３佐の司令テントはもちろん、陸自全ての電子機器がダウンした。そして、金華山に展開していた兵士全員が気絶した。
その暗闇の中を、横山は清美を、司老は透を背に、白根の照らすライトを頼りに駆け下り始めた。
ー残るは公安だけだー
白根はつぶやいた。

登山道は、夕陽ヶ丘の森林事務所に向かって下りて行くが、白根は頭に叩き込んだ地図を読んで、藤右衛門東洞（とうえもんひがしぼら）に登山道を外れた。そこから、藤右衛門南洞に入り、伊那波山東洞に突っ込んでゆく。要所要所に、陸自の隊員が気絶している。

道三隧道に入った小谷利治は、いったん外に出る度に手間取った。時間は４時３０分過ぎ。伊那波神社からの入口をやっと見つけて、学生会館に向け地下を移動し始めた。
危うく穴に落ちそうになりながら、行き止まりに来た。
２人は居ない。
「外に出たのか？。」
その背中に、硬い何かが当てられた。
「待て。小谷だ。陸自が動いた。２人は下山して、もう上にいるはずだ。」
「息子か。」
小谷利治は、嫌な汗を感じながらゆっくり振り向いた。
背中に当たっていたのはライトだった。分部の後ろに父親もいた。
「上に出たら撃たれるな。」
分部は小谷晴朝に言った。
「それでも上がるしかない。…自分が上がる。２人をここに降ろす。待ってろ。」
「小谷のオヤジさん。俺が出た方がいい。こいつを持って上がれば、むやみには撃たれない。」
分部は核弾頭をポケットから出した。手の中にスッポリ収まる大きさの三角錐が出てきた。一つの街を熱線と爆風で吹き飛ばすようには見えなかった。
「いや。リスクを分散する。２人で上がろう。被弾する可能性は２分の１になる。」

「いいだろう。」
「利治はここで待機。お前はこの世界の人間だ。後々面倒になる。」
利治は右手を差し出した。
「父さん。気をつけて。元気で…向こうの僕をお願いします。」
「それは問題ない。佐恵子によろしく言っといてくれ。」
小谷晴朝は息子の手を握りしめた。

白根は、久利坂が取るであろうポジションに思いを巡らせていた。
「部長。学生会館のどこに分部と小谷刑事が?。」
「知らん。俺の勘では東側だ。司老横山。俺は久利坂のバックを取る。お前らはこのまま行け。」
背中の清美も透も、まるで何も背負ってないかのように斜面を下る司老と横山に驚いていた。おそらく、こういった訓練を積んでいるに違い無かった。
白根は視界から消えた。

学生会館の敷地内に入った。司老は足元で何か光ったのを感じて、透を背負ったままジャンプした。横山も間一髪ワイヤーを飛び越えた。
司老は、敷地の南側から東側に向かって走った。
「司老さん。あのワイヤーまさか、爆弾じゃないですよね?。単に警報ですよね。」
「どっちにしろ、引っかかったら終わりだ。よく見とけ!。」

分部と小谷晴朝は、地下からせり上がった。
朝4時の森のひんやりした空気の中に、2人はかがんで出て横に転がった。

分部の目の前に、アルマーニの革靴と紺色のスラックスが有った。
「やっぱりここか…その石碑が場違いだ。」
久利坂は、折りたたみ式の小さなイスに腰掛け、アルミの水筒からキャップにコーヒーを注いでいた。
「松屋の最高級ブレンドだ…朝の森によく似合う。」
分部の右手の核弾頭をチラリと見た。
「とりあえず。こいつを一杯飲み終えるまで待て。その後、お前がそいつをどうかするのが早いか…俺が銃を抜いて、お前の脳髄を破壊するのが早いか…競争だ。」
分部は憐れむようなニュアンスで言った。
「あんた。俺によく似ているな。物事をもて遊んで楽しむのが好きらしい。」
「公安なんてものは、犯罪者の上を行かんと話にならん。核弾頭を持って走り回るヤツより、凶悪にならんと勝負にならんだろう?。」
「小谷刑事は違うな…。俺の人間性を愛するまでに理解し、分析している。どんな謀略も、その前では通用しない。」
久利坂は冷ややかに笑った。
「俺も警察学校ではそれを目指した。だが、現場で思い知らされた。そんな物は理想に過ぎないとな。ただの夢物語だと。現場ってのは地獄の修羅場だ。夢も理想も情け容赦もない。どうやれば愛せるのか…教えてもらいたいものだ小谷刑事さん。」
小谷晴朝は答えた。
「教える事などできん。この現場で自分でつかみ取れ。一度持った理想なら、信じる事だ。」
小谷晴朝は、久利坂に可能性を感じた。しかし、ここで久利坂が自滅する可能性もある。小谷晴朝は動かない事に決めた。
久利坂のかかとに、何かスイッチらしき物があるのが見えた。それが何に繋がっているのか?…もしかしたら、自分ごと吹き飛ぶつもりかも知れなかった。

司老は、遠くから久利坂の姿を認めた。
「クソッ。ポジションを押さえられた。こっちだ！。」
横山を促し、学生会館の反対側に進路を変えた。
「どうするんです？。」
「バッテリー切れだ。」
「バッテリーって何です？。」
「磁気嵐発生装置だ。今日2回使った。会館にコンセントが有るはずだ。コードをつないだままやる。」
「間に合うんですか？。」
「横山に背中のお二人さん。悪いが延長コードを捜してくれ。ヒューズが飛ぶかもしれんが、一回で久利坂を黙らせられるだろう。」

白根も久利坂が堂々と座り込んで、コーヒーを飲んでいるのを見て恐怖した。
ー自爆もある。あの男なら。核弾頭は2アクションで起爆する事を知ってるはずだ。分部は知らんだろう…伊那波神社に行って、道三隧道に入って出るか…。ー
白根は移動した。

「遅い。2部の連中。それとも小細工に動いてるか…。」
久利坂は小谷晴朝の答えは無視して、チビチビとコーヒーを飲んでいた。
「…早くしないと、コーヒーを飲み終わっちまうぞ。」

司老と横山、清美と透は延長コードを捜して、学生会館の中を走り回っていた。
「スライドか映写機が置いてある所に有るかもしれんぞ、横山。」

「それがどこに有るんです？。」
「倉庫だ。地下から探そう。」
清美と透は、無人のはずの会館の部屋から、ざわめきが漏れてくるのを聞いた。
ー動くのかよ？…昔のエロフィルムって…本当にエロいのか？…まぁレトロだから…でも非合法フィルムってんだから、バッチリ写ってるかも…おっ動いたー
透はそこに映写機が有るのを確信して怒鳴った。
「コラッ！。お前らそこで何やってる！。出て来い！。」
ピタッと声が止まり、バタバタ音がして窓ガラスの開く音がした。
複数の地面に飛び降りる音がして、部屋は静かになった。
透は鍵の掛かったドアを体当たりで破った。中では、ムードたっぷりに女性が手招きをしている。清美が凄い勢いで入って来て、映写機の延長コードを引き抜いた。
「透ちゃん。だまされちゃ駄目！あんな女に。」
何の事やら分からない透は、延長コードをまとめて走り出した清美の後を追った。

久利坂が、地面に飛び降りる音を聞いて顔を向けた。
「何だ？。2部じゃないな。あんな音を立てるのは…。」
さすがの小谷晴朝も、スイッチにかかとを載せられていては、打つ手が無かった。分部は核弾頭の手動起爆装置が2アクションである事を知らなかった。知っていれば1アクション入れて、久利坂にプレッシャーをかけられるのだが…。
久利坂は、注意深く分部を見ていた。1アクション入れるかどうかで、展開か変わる。
…しかし、入れるタイミングで分部は動かない。
久利坂はー知らないーと判断した。

「分部。核を離せ。殺さないとは約束できんが…その時は、苦しまずに死なせてやる。」
小谷晴朝は動かなければならなかった。久利坂は、何らかの確信で分部を射殺すると感じた。

学生会館では、延長コードに接続した磁気嵐発生装置を、一番近い窓に司老が引っ張っていった。
がっ。電源ランプが消えた。
「横山。電源ランプが消えたぞ？どうなってる！。」
すぐに電源ランプが戻った。
「コンセントは差さってます！。断線しかかってるんです。引っ張ると切れますよ！。」
「家庭用電源じゃギリギリまで近ずかないと効果がない！。」

白根は、道三隧道の中で待機している小谷利治の所まで来た。
「小谷刑事！。銃の安全装置を外せ。２人で出るぞ！。向きはこっちだ！。」
「そんな無茶な。」

「横山！。電源を安定させろ！。」
「引っ張るからですよ！。」

小谷晴朝が意を決した時…久利坂の後ろがボンヤリし始めるのに気付いた。
ー清美ちゃんか…これは助かるかもしれんー
金属製の楯と機動隊のヘルメットが、久利坂の後ろでクッキリし始めた。

「何だ…。」
久利坂は驚いて立ち上がると、機動隊の列を見た。
学生会館の窓から、司老が磁気嵐発生装置をかざしながら、横山に文句を言っている。その後から、清美と透が外に飛び出してきた。
久利坂が2人を見た時…かかとがスイッチから外れた。
小谷晴朝は、全力の葡伏前進(ほふくぜんしん)でスイッチを左手でさらった。
そこに白根と小谷利治がせり上がってきて、久利坂に銃口を向けた。
久利坂は、ゆっくりと両手を挙げた。

次話!
ー第17話生還

ー第17話生還

ー第17話生還

「白根刑事部長。これは説明が要りますよ。」
久利坂は怯えた（おびえた）目で、湧いて出て来た機動隊を見ながら言った。
「分部。メモリアルセンターの鍵束を捨てろ。次に核弾頭を久利坂さんのポケットに入れろ。それで向こうに戻れ。それ以外の結末は、この白根登（しらねのぼる）が許さん。射殺する。」
分部はゆっくり立ち上がると、鍵束を足元に落とした。両手を挙げている久利坂のポケットからプラスチック爆弾を取り出すと、核弾頭を入れた。
「行け分部。小谷さん、清美さん、透くんも…。」
金属製の楯が開いた。分部がその間に入った。まだ刑事の田島が、差し出された両手に手錠を掛けた。続いて清美が入り、透が入った。

「2部には感謝します。我々だけでは、こうは行かなかった。」
「いや、小谷さん。これはこちらの都合でしたまでの事。気になさらないように。」
「では。」
小谷晴朝は、白根と息子に握手した。
司老は、まだ窓の所で電源ランプを気にしていた。その司老は、久利坂がニヤッとしたのを見逃さなかった。
「撃て！。」
久利坂が叫んだ時、たまたま電源ランプは司老に味方した。公安の

精鋭２０人が、森の中でバタバタと倒れた。白根も小谷利治もレンジに入っていて倒れた。
開いた穴のせいで、小谷晴朝と久利坂は無事だった。
久利坂は銃を抜いたが、田島が小谷晴朝を楯の中に引きずり込んだ。
狙いを定めた時には、楯は閉じていた。あきらめた久利坂は、追いかけて向こうに行ってしまう愚は犯さなかったが、殺気を感じて地面に伏せた。
雨のように、金属製の楯に銃弾が跳ね返り始めた。陸自が目を覚ましたようだった。
やがて楯はボヤケ始め、銃弾は森の中に吸い込まれていった。
「事態は収拾された?。…白根にやられたか。」
久利坂はポケットの核弾頭を確かめながら、銃撃が止むのを待った。

「小谷さん!。よく無事で。」
田島が笑顔で小谷に言った。
「そうだ。向こうのお前に、お前を頼むと言われた。これからは少し厳しく鍛えてやろう。恩返しだ!。」
「はぁ…。でも、分部は変わりましたね。」
「変わったんじゃない。元に戻ったんだ。元はああいう人間だったんだ。…しかし、よくここが分かったな?。この機動隊が居なかったら、死んでたぞ。」
「特別編成別班の情報です。地磁気の異常を探知する装置とかを持ってまして、雨屋とプールをカバーしてたんですが、ここが出たと云う事で…間に合うかどうか賭けでしたが。」
「それは?司老とか云う?。」
「えぇ。司老さんとか云う、まだ２０代の刑事です。」
小谷は、思わず学生会館の窓を振り返った。
「…親父か。血だな司老家の。」

「何です?。」
田島は小谷の視線を追った。
「多分、その息子に同じような物で助けられた。」
「そうですか…。私も一度行ってみたいですね。」
「行くと大変だぞ。我々のせいで、向こうに処分者が出たかもしれん。償いようもないが…。」
「でも我々は救われました。向こうの方々に感謝と敬意を払わなければなりません。」
「その通りだ。それでいい。」

ー5年後　道三隧道

分部は網走刑務所に送られ、5年服役してのち出所した。
小谷と共に、ハシゴを持って道三隧道に入った。
上の通路に行く為にハシゴを掛けなければならない。その場所に窪みがあった。
「ここにハシゴを入れると、落とし穴が作動する仕掛けだな?。」
分部はハシゴにロープを結び、引き上げられるようにしてハシゴを置いた。何も起こらない。
小谷は、不自然に置いてある石のブロックを壁際に見た。
持ち上げて、ハシゴに乗せてみた。
バンッと音がして、小谷が飛びのいた。ドッーと天井からハシゴに土砂が降り注ぎ、床が抜けてハシゴは落ちた。
2人でハシゴを掘り出し、外から土を持ち込んでトラップを完全に埋めた。
再度ハシゴを掛け、上の通路に入った。斎藤道三の波の家紋を刻んだ石組を外して地図の間に入った。1ヶ月を費やした。
そこには石の壁に、岐阜市街いっぱいに広がる地下通路網が刻まれていた。

その地図の前に、斎藤道三と思われる頭蓋骨が安置されていた。石の容器の中で、わずかに頭髪が残っていた。
「あったな。爺さんに教えてやるか？。」
「いや。爺さんは自分で見つける。穴は埋めた。死ぬ事はない。」
「これからどうする？。」
分部は壁の地図を見つめていた。
「やる事ができた。爺さんとこれを全部調べる。…見ろ。通路は2階建てだ。」
「建設省と防衛庁を敵に回してか？。それくらいの刺激がないと、犯罪者に戻りそうだな。」
分部は微笑した。
「もう犯罪を犯す理由がない。それに。小谷刑事の人間愛に、勝てる犯罪者はいない。」
「褒めてくれるのは光栄だがな、上には上がいる。」
小谷は鋭い目で、頭上に広がる自分の戦場を見上げた。

ー第17話後書きに続く

ー後書き

ー第１８話　後書き

ここまで読んで下さった読者さん。お疲れ様でした。投稿ペースが悪く、お待たせしましたが、なんとか完結までたどり着けました。たくさんのアクセスに感謝します。

主題が人間愛と云う事で、犯人と刑事が協力して逃げると云う刑事物に挑戦してみました。月刊武上７月号でも書きましたが、犯罪者分部と云うキャラクターを完結させるため、更生させると云う、ちょっとリアリティのないストーリー展開もギャンブルしてみました。ついて来てもらえた読者さんが、半分ぐらいなら成功かなと思ってます。これは意見が割れないといけない問題だと思ってます。
ストーリー展開のリズムの問題で、鈴屋署長が公安に情報を漏らしている事を、田島本部長が気づく部分を省略しました。裏では、そういった攻防もあった事を付け加えておきます。
平成２０年の方で、処分者が出たかどうかについては、一切出なかったと判断してもらって結構です。核弾頭を諸外国に秘する為に、事件自体が無かった事になったと云う事です。
ドイツ製核弾頭については、１から作り話ですので本気になさらないようにお願いします。同じように、道三隧道もこうした伝承も古文書も存在しません。分部をどうやって岐阜城に逃がすか？一週間地図とにらめっこした末の妥協案です。長良川の周辺は、斎藤道三時代河原で、常に川筋を変えていました。こうした水の多い沼地で、地下通路を造る工事は不可能だったと思います。また、何百年もメ

ンテナンス無しで、個人の修理くらいで使える状態にはならないでしょう。これも本気で、岐阜に探しに来ないようにお願いします。ちなみに、セイヤは三橋刑事の息子で、ミクは加藤刑事の娘です。息子と娘がくっついている事に2人が気づく部分も本筋を離れてまで書くのはどうかと云うので、省略しました。プールサイドで分部の足を引っ掛けさせる為に登場させましたが、清美と透との時代的ギャップを際立たせる役目も果たしてくれました。

次回作は、続いて君はあの日のまま…のサブキャラクター長沼優（ながぬま ゆう）が主人公となります。サブストーリーではなく、別の独立した物語となります。しかし、清美と透に2部から横山だけを登場させます。長沼ユウが、中国スパイを相手に子犬を救出する話です。読者さんからメッセージ欄に頂いた内容を元に、人間の都合と命の重さを主題に、深刻にならないように、しかし問題提起も盛り込んで頑張ります！。よろしければ覗いてやって下さい。

２００８年7月6日

武上渓

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3487e/

カウンターアタックー君はあの日のまま戻ってきた 小谷編

2010年10月20日13時38分発行